

32-37.

吉江孤雁譯述

ツルゲーネフ短篇集

東京内外出版協會

ツルゲーネフ略傳

Ivan Tourguenief (1818—1883)

千八百十八年露西亞のオレル州で生れた。家は苗家で、父は騎兵大佐であつた。六歳の時、ニコラスとイフンの二人の小兒を残して死んだ。母は廣い土地と多量なツルゲーネフは此母の監督の下に育てられ、モスカウ及びペテレスブルグの。四十三年にベルリンへ送られた。

千八百五十二年、ツルゲーネフの第一の小説短篇集が世に出た。A Sportsman's がそれである。廣く讀まれた作で、社會の有らゆる階級に迎へられて讀まれた。一 して「エマージェンシオン 黒奴開放」の動機も此作によつて生ぜられたとのことだ。此等の短篇は 酷に農夫を取扱ふのを親しく目撃して、同情の餘りに出来たものだ。此母親は如 性で "Mama" と云ふ作に出てゐる婦人は此母親だ。此母親は自分の子が優れ 事は遂に解しえずに一意墮落したものだとはかりに思ひきめてゐた。

千八百五十九年に "A House of Gentlefolk" を出して、一層名聲が揚つた。其 の前夜(相馬御風譯)が出た。後三年して "Fathers and Children" (父と子)が 十七年には "Smoke" (煙)が出て、其翌年には最大篇 "Virgin Soil" を出版した。

き草) (二葉亭四迷氏譯) "Dream Tales and F..."

夢語りと散文詩) 其他て全集は十五冊の

1413
1883
30

ツルゲーネフの晩年は大方本國には住まず、
リにゐて、ヴィアルドワー・グアシアといふ有
掛けて行つて、千八百七十九年には、オックス
を贈られた。世を去つたのは千八百八十三年カ
つた。生前の望みに従つて、遺骸はベテレスア
ビリンスキの墓近くへ葬つた。

ツルゲーネフの作全體に亘つての一種の寂し

、ウォーヅウォースの言ふ "Still sad

music of humanity" (故國木田獨歩氏は「人生の『静寂』と譯された) に耳傾くる者の胸に耐へ得ぬ響
きを奏するのだ。若しスラブ民族の一特質が、病的だと思はるゝまでに自己解剖に走るとするならば、
ツルゲーネフも確かに其傾向を代表してゐる人である。が、此解剖は同時に世界萬人の胸の解剖であ
る。「我力及ばざれど」といふやうな絶望的な厭世的な傾向はひとリスラフの青年間にのみ現はれてゐ
る現存してはない、作中人物の解剖は世界到る處の人物の解剖だ。其作を讀めば讀むほどいかに作者
の性格の偉大で深酷であつたことが思はれる。

序 言

○ツルゲーネフの作中で、主に作者の自然を多く描いてあるやうな短篇を集めて見たいと思つたので
あつたが、一冊にまとめるに付いて、大體にページ数の制限を附せられてあつたので、思ふだけ集め
る事の出来なかつたのは残念に思ふ。

○集中の「犬」は別に自然とは關係はないが、從來のカーネットの譯した全集中になかつたのを、好意を
受けて、さる雑誌から見付けて譯出したのだ、怪異な趣味のつしまれてゐる所を見ると Dream Tales
など、全じ頃の晩年の作ではあるまいかと思はれる。

○「森林の旅」はツルゲーネフの自然に對する思想を窺ふに最も適した作のやうに思ふ。猶次手だが、
ツルゲーネフの自然觀については中澤臨川氏の同上の題で精細に論ぜられた論文がある。

○譯文を集めるについて、「太陽」其他の雑誌にて轉載の好意を興へられたるを深く感謝する。

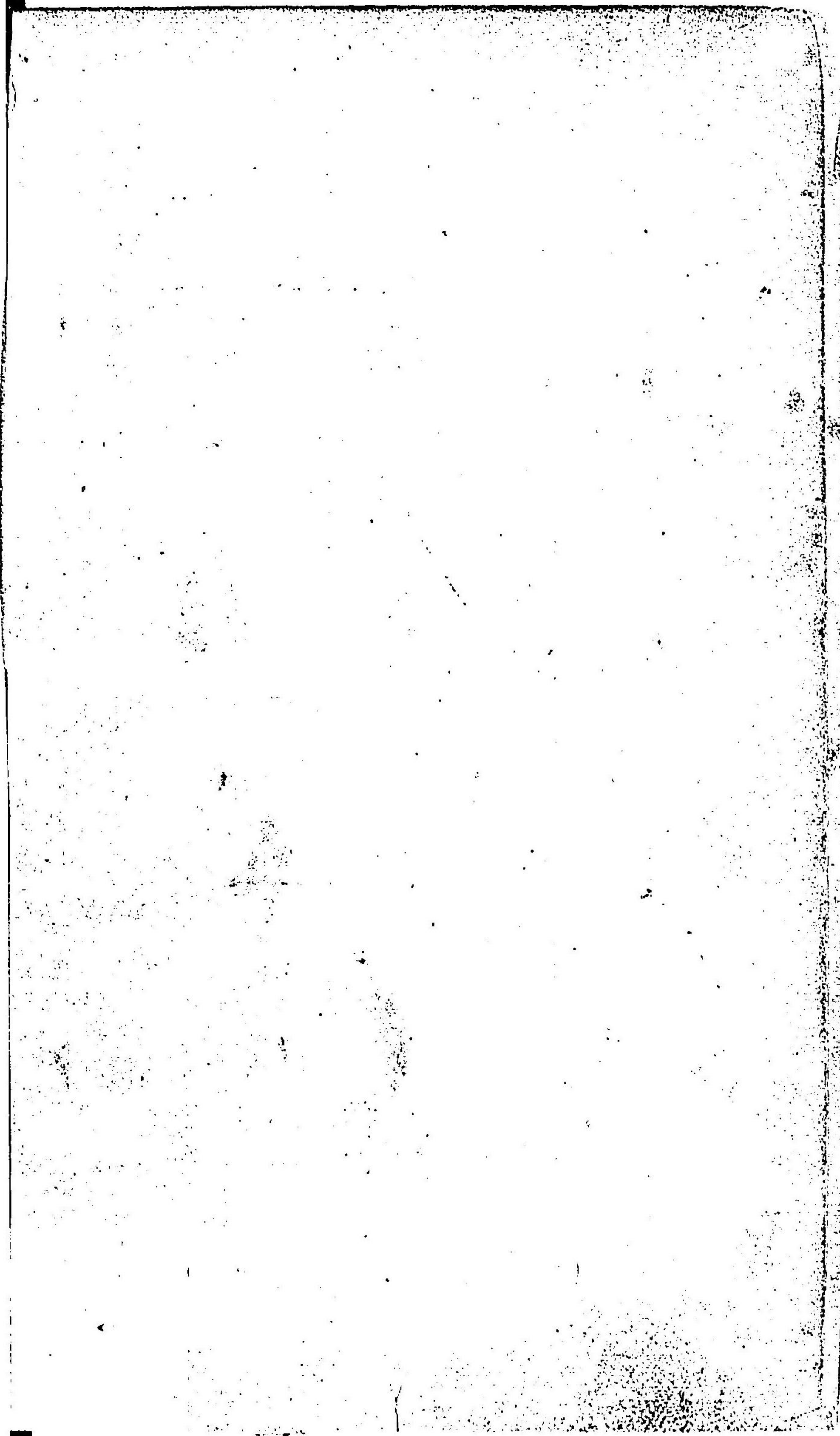
明治四十一年十一月初旬

譯 者 記

目 次

一、森と原野……………	一六七
一、犬……………	一八四
一、山 番……………	二三五
一、日 照……………	
一、グリスト……………	
一、森林の旅(第一回)……………	一
一、森林の旅(第二回)……………	二八
一、ピエジンの曠野……………	五二
一、死……………	一〇一
一、葎の清水……………	一三五
一、散文詩……………	一六一

目 次



欠

MISSING

えて了ふ、ばかりでなく、人の靈魂は衰へ、喪はれ
ら消え去つて了ふかとも感じて来る。——此時ても
も動くまい、彼は身の孤獨を感じ、脆さを感じ、泪
こそくと、世の煩い勞苦の中へ返つて来る。自分の作つた其世界では幾分
氣安くなる、そして樂になつて自分の身の貴重な事も自分の身の力をも信じ
やうとする。

此様な考へは、五六年前、私が、水のじくくしてゐるレセ、夕川の岸の
上の小さな宿屋の階段に立つて、始めて其森を眺めてゐた時に、私の胸の中
を往來したのであつた。眼の前には遠く長く脈をひいた樅の木の青いこんも
りとした森があつて、こゝかしこ點々として、赤楊樹の矮い緑が其間を綴り、
松の森は天際を抱いて果もなく、會堂の白壁だの、牧場などは何處にも見
れない。目路の限り、悉く森又森で、到る處只木の頂の凸凹してゐる。

える計り、其森の上、遠くの方に當つて、いつももや／＼と霧がかまつてゐる。

此森の不動の姿の示してゐるのは、怠りの休みではない、いや——生のない死んだ何物か、其壯觀に打たれてゐる時でも、八方からひし／＼と私の身に迫つて來るのであつた。

私は其時の景色を思ひ出す、大きな白い雲が靜かに高く舞ひ上つて行くと、後は、眞夏の日光が、大地を照らし付けて物音一つない。赤さびた水の流は厚く茂つてゐる蘆の中を、水泡も立てずに繞り／＼つて、其川底に苔の圓坐が點々として微かに見えてゐる。此川の堤は沼の泥の中へ没して了ふが、又遠くの方にぎら／＼と美しい砂の光つてゐる眞白い丘となつて現はれる。一條の往還が此の小さな宿屋の傍を走つてゐる。

此道路の上に、丁度宿屋の階段と向ひ合つて、色々の箱だの籠だのを

だ荷馬車がゐた、其持主は、鷹のやうな鼻と鼠のやうな眼をした、
た、おまけに跛な擔夫で、自分と全じに跛な小さな馬を其車に付

此男は蓋餅を賣るので、此からカラチエフの市場へ出掛けて行かうといふ所であつた。と、此時、路の先の方へ様々な人影が見えて來た、其後方からはまだ大勢ががや／＼やつて來る——やがて、其群衆がはつきり視線の中へ入つて來ると、各自手に手に棒を持って、小さな囊を肩にかけてゐた。疲れてはゐるものゝ猶踏張つて歩いて行く、其歩さ付きや、日光に焼けて眞黒になつてゐる顔やなどを見ると、遠い所からやつて來た事が解る。草作りや坑夫の一群で、今仕事先から歸つて來る所だ。親分らしいのは、頭、純白い老爺で、斷えず／＼と睨廻して、沈着いた聲で、後方へ遅れ、
嗚りつける。

「ヤイ、ヤイ、貴様達、ヤイ」一行の者は此れをあびせられると、

て歩みつゞける。

此群の中から一人、前の廣く開いた上衣を着て、帽子を深くかぶつて、何か怒つても居るやうに見える小男が、つかくつかと先きの蓋餅賣の所へやつて来て、出し抜けに問ひかけた。

「幾許だい、一體此餅や、え、あゝ」

「何種餅ですか、お前さん」と、餅賣は狼狽して、細い小さな聲で答へる。

「一錢のもの、五錢のものもあります、五錢のを上げましようか」

「甘まずぎらあ」と投げるやうに言つて、其皮上表は車の所から退つた。

「さあ、急いだ急いだ、ヤイ」と、老人の聲が響く、今夜の寢床はもう遠か

無えぞ」

「物知ずめ」と、其一群が行つてしまふかしまはないに、餅賣は、じろりと

私の方を見ながら言つた。「こんな立派な物が、あんな奴等に適合もんけえ」

餅賣は急いで馬の支度をして、川端まで下りて行つた。其川が見えてゐる。白い毛帽(森の中でかぶるもの)をかぶつた一人の農夫が、低い泥小屋の中から出て来て、餅賣を川向ふへ渡してやつた。輪一つの其荷馬車は、踏み固めて深い轍の痕跡を刻んだ路の上を、折々ガタ／＼音を立てながら向ふの方へ行つて了つた。

私も馬の用意をして、また渡場を越えた。五六哩の間は水のじく／＼してゐる草原をやつて来たが、やがて、森の中の開墾地へ行く、狭い、小高く丸木を敷いた道へ出た。馬車は其登道の丸太の上を、ガタ／＼通て行き、私は下りて歩いて行た。馬は蝸や蠅を避ける様に、鼻を鳴らしたり頭を振つたりしてのつそり／＼歩いて行く。森はやがて、其奥深くへ我々を迎へ入れた。森の外廓の草原に近い邊には、赤楊樹、白楊樹、菩提樹、楓、樅などが生えてゐて、稀れには、こんもりと茂つた縦の樹が、隙間も無い木立の壁の面

に表はれて来て、我々の周囲を取りかこみ、猶奥深く入つて行くと、裸になつた赤色の松の幹が立つてゐて、やがてまた、雑木の矮林が廣く續いてゐて、榛樹の實や、山秦皮、莓だの、其他の丈夫ないら草が一面に繁茂してゐる處へ出た。

日光はチカ／＼と樹上に輝き、木々の枝で濾されて、此處彼處に青白い線となり點となつて地上に達してゐる。鳥の聲はほとんど聞かれない、…禽類はいつたい大森林は好かないものだ。たゞ折々、やつがしらの三度づつ繰り返す物憂さうな呼び聲か、山雀やかけすの怒つたやうな叫びがあるばかり、其他に、いつも黙つて、只ひたりさりてゐる鳥が、バサ／＼と開懸地の上を横に飛んで、其柔しい羽から碧光の色をふらしてゐる。時々樹立がまばらになると、日光は私達の頭の上へ直射して来る。馬車はやがて開懸した砂地のやゝ廣い場處へ來た。

其畑の中には、ひよろ／＼したライ麥が、畝を作つてゐて、音も立たない青白い穂を垂れてゐる。此開墾地の一方には舊い破れかゝつた小さなあつて井戸の上には、十字架が曲んだまゝ懸つてゐる。どことも目に見えないが、小川の流れが潰々と湧いて、ちやうど、空虚な饅頭の中へでも流れ込むやうに、さら／＼とたえず其響をかへてゐる。

行く手を見ると、道は近頃倒れたばかりの赤楊樹の爲めに横切られてゐる。周囲を取りまいてゐる森はいかにも舊く、たけ高く、眠つてゐるやうで、其中で空気が逃げだす途がないやうに見えてゐる。處々の水ぎには開墾地が出來てゐて、其兩側には暗緑の色を帯た濕地がつゞいて、蘆や小さな赤楊樹が一面に茂つて、其中を鴨が二羽づゝ對をなして飛んでゐる——此等の水鳥が狼狽して、松林の中へかけ込んで行く姿はいかにも奇態で、がア、がア、がア、がア、といつまでも長く引いてゐる。

見ると、一人の牛追ひが、草の中から一群の牛を驅りたてゝ出て來た。短い尖つた角をした藍色の牛は、のそり／＼と藪を分けて、開墾畑の畔まで來て、大きな黒い目でちつと、私達の前を走つて行く犬を見詰てゐる。輕やかな微風が、木の燃ゆるかすかな辛いやうな臭を送つて來て、遠くの方には、白い煙が圈をなして、青い森の空氣の中を渦卷さあがつてゐる。此れは農夫が硝子製造場か、鑄物工場へ送る爲めに炭を焼いてゐるのだ。

一層すゝめば進むほど、四邊の暗さ静けさは増して來る。松樹の森は、何日も静寂かなもので、たゞ枝と枝との間に一種の長びいた唸り聲か、或は押し付けられたやうな呻吟の聲が洩れ聞こえるばかり……何處まで進んで行つても、森の此の永劫の唸り聲は止む時がない。氣は次第に沈んで、急いで快活な日光の照らす處へ飛び出して、思ふさま呼吸したいと望んで來る。

殆んど同じ調子で十二哩程進んで行つた、折々は馳け足もやつた。私は

日のある中に是非ともスフィアトリーまで行き度いと思つてゐた。此スフィアトリーといふのは此森の真中にある小村だ。途中二度ばかり、荷馬車の上へ、剣いた木の皮や、長い丸太を積んで來た農夫に逢つた。

「スフィアトリーまではまだ遠いかな」と其一人に訊くと、

「いや、さう遠かありませんね」

「どのくらゐ？」

「まあ二哩少しささかね」

一時間半か、まだそれ以上も休まず進んで行つた、すると、また荷を積んだ馬車の響が聞こえて來て、一人の農夫が其車について歩いて來た。

「オイ、スフィアトリーまで、まだ幾許くらゐある」

「何ね？」

「スフィアトリーまで幾許くらゐ」

「六哩」

夕陽がもう沈みかゝつてゐた頃、やうやく森を出て、一つの小村の見える所へ来た。凡そ甘軒ほどの家が、舊い木造の會堂の四周に群つてゐる。此會堂は、其家並の中の只一つの緑色の圓頂塔を見せてゐて、其小窓には、今や落日がざらざらと反射して紅の光を放つてゐる。

家畜の一群が、私達の車を追ひ越して、唸つたり吠えたりしながら通つて行くと、村の若い娘達や、百姓のかみさんなどが忙はしさに、各自の家畜を迎へ取らうとやつて来る。頭髮を白ぼい小兒等は元氣の好い聲をあげて、いふことを聴かぬ豚の後を追つかけて行く。

塵埃は軽い雲のやうに街路から巻き上つて、空高く登るにつれて眞紅の色を閃めかしてゐる。

私は村の長老の家へ泊つた。狡猾くていかにも、伶俐い山林官の一人で、

村の者からは、地の中までも見透す奴だといはれてゐる。

翌朝早く、此老人の長男と、エゴルいふ百姓と三人連れて、山鶴、山鶏、などを射撃うといふので、作馬二匹をつけた小馬車で出掛けた。

森は天際を劃して、一つの青い環をなしてゐる。スライアト一の村のまはりに、耕地は凡そ二百エーカー位はあるといふ事だが、狩りに好い地を見付けるには、少くも五哩位は出掛けて行かなければならぬ。此老人の子は、コンドラットといふので、亞麻色の頭髮をした、頬のばら色な、いかにも人の好きさうな、おだやかな顔付をして、親切な話好きな男であつた。此男が馬を御して、エゴルは私の傍に坐つてゐた。私は今此男について少し話したいと思ふ。

エゴルは、何人からも、極く敏捷い獵師だと思はれてゐる。此附近五十哩の土地は、其一尺一寸だつて、エゴルが何度となく踏んでゐない處はない。

エゴルは火薬や彈丸のなくなるのを氣遣つて、めつたに射撃かつた、山鶏をさびき出したり、松鷄鳥のゐる處を見付けたすだけてエゴルの盡さるのだ。エゴルは一體正直な性質の男で、おしやべりでもない。すにも無頓着で、自分の捕つた鳥の數なども決して大げさに話すやうなかつた。——獵師には珍らしい癖だ。中脊の瘦せこけた方で、青白顔と、大きな正直さうな目と、全體の調子が、ことに固く結んだ唇の亂れない静けさを見せてゐる。何か物を言ふときは、ちよつと、いの中の笑ひといつたやうな微笑を見せるが——此穩かな笑が如何にも好ましい。酒一滴ものひぢやなし、せつせと働いてゐるが、それでやつぱり何も香ばしい事はない。女房はいつも病がちで、兒は死んで了ふ。二度とふたゝび頭のがらないやうに、次第に深くへ入つて了ふ。それは、百姓でも何人も一銃いぢり、をする奴に、ろくな田地持の無いのは受合な話だ。エゴル

はいつも、森の中にばかり入つて居て、嚴しい陰氣な、人間ばなれの色と面をつき合はせてゐるのと、それに持つて生れた人とは一風變つた、質として、此男のする事、爲す事に、幾許かつ目立つて品も出来れば、もつて来た——威嚴と言つても、陰氣だといふわけではないが——まあいはいが、つしりとした男の威嚴だ。

エゴルは若盛りの頃は燕麥の中に待伏せしてゐた。大熊を七つまで殺した事がある。此頃撃つた奴は四晩も待伏せしてゐて、やうく殺す事が出来たのだ。其時あいにく、彈丸は只一發しか持つてゐず、おまけに熊の奴もなか頑固で、容易に横腹を此方へ向けなかつたさうだ。

其熊を殺したのは、私が村へ来る前の晩の事であつた。コンドラ——に連れられて、エゴルの家へ行つて見ると、裏庭で、大熊の前に蹲つて、切れさうもないナイフで脂肪を切つてゐた。

「立派な奴を撃つたんだね」

エゴルは頭を上げて、初に私を見て、次ぎに私の連れて行つた犬を見た。

「狩獵にもいてなさつたんですか、モシノイには山鷄がゐます——さう、三群ぐらゐは、それに山鷄の五六羽ぐらゐ」といつたが、それつきり、また仕事に取りかゝつて了つた。

此エゴルとコンドレーと三人、その翌日、獵場を探がしに出掛けたのだ。スフィアトー附近の廣場は急いで走らせて行つたが、森へ入ると、また道の上を静かにやつて行つた。

「やア、山鳩」と、コンドラットとは不意に私の方を振りむきながらいつた。「撃つと好いな」

エゴルはコンドラットの指した方を見たが、何も言はなかつた。山鳩は百歩ばかりも先方のはうを飛んで行つた、四十歩はなれて居ては、もう迎も撃

てやしない。鳩の羽はその位の強さはある。話好きなコンドラットはまだ色々な事を言つてゐたが、森の静寂けさに壓せられてとうとう黙つて了つた。行く手を真直と見やりながら折々一言か二言交はすばかり、馬のフウ〜いふのや、鼻をならすのを聞きながら、やがて、モンシノイへ來た。モンシノイと云ふのは、舊い松の木林で處々に樅の若木の生えてゐる處を云ふのだ。馬車をあつると、コンドラットは馬へ柄の喰付かないやうに藪の中へ馬車を引き入れた。エゴルは引金を験らべて十字を切つた、何をするにてもまづ斯うするのだが、此男のくせだ。

今私達の入つた森はすばらしい老樹だ、韃靼人が此邊をうろついて居たかどうかは判然らないが、亂世の頃にはロシアの小賊や、リシユアニア人などが、確かに此處いらの森の深みに隠れてゐたに違ひない。巨きな松の樹の稍々曲つた、重くるしい、青黄ろい色をした幹と、幹とは可也間を置いて

立つてゐる。其間々には、おなじ若木の松が列をつくつて立つてゐる。地
 びたは一面青苔が生えて、其上に枯松葉が散らばつて、びか／＼光つてゐる。
 厚い藪の中にはブルーベリーの實が熟して、其強い薫は、麝香のやうに呼
 吸をもとめるくらゐだ。

日光は松の枝の高い網細工を射し通す事は出来ないで、森の中ぢうは、何
 處も呼吸を塞ぐばかりに暑いが、暗い事はない。重々しい透き通るやうな松
 脂は、汗の大きな滴のやうに流れ出て、粗い木の皮を傳つてぬら／＼と落ち
 て来る。陰も光も射さない静な空氣は顔に衝きたゝる、何物も音を立てず、
 自分達のふんで行く足音すら聞こえない。苔の上を行くと、絨毯の上でも通
 るやうだ。ことにエゴルは物影のやうに静かた、踏んで行く藪さへがさとも
 いはない。折々鋭い口笛を鳴らしながら大やうに歩いて行くと、後方のはう
 て、山鶴が直ぐにそれに應呼すると、思ふと、眼の前をすつと飛んで樅の木

の茂みへ身をかくした。エゴルは其鳥の居場所を指して教へたが、ど
 目を見張つても、私にはとう／＼見付ける事が出来なかつた、エゴルは自分
 て其鳥を撃つた。また骨頂の二對に出つくはした。番鳥が遠くの方からけ
 いましい、太い聲をあげた。が、それでも、うまく三羽の若鳥を射つ事は出
 來た。

メイダン(タールを取つた場處)へ來ると、エゴルは不意に立止つて、私
 を呼び掛けた。

「熊が水を飲まうとしてゐたんでさあ」と言つて、美しい苔の一ぱい生えた
 穴の真中につけてある、廣い新らしい引掻きを教へた。

「此が爪の痕跡か」と私は訊ねた。

「はあ、だが、水が乾いてしまつた。やあ其松にも痕跡があるわ、奴さん蜜
 を取りに登つたんだな、ナイフのやうに爪で裂いてあらあ」

私達は森の最も深い所まで進んで行つた。エゴルは只折々上を見上げて、静かに何か信じてゐる事があるらしい調子で歩いて行く。と、半ば以上塞つて了つた溝で取圍んでゐる高い丸い壘壁が目に入つた。

「ありや何だ、やはりメイダンかな」と私は訊いた。

「いや」とエゴルは答へた。「いや此處は盜賊の町のあつた所です」

「ずつと以前に？」

「え、ずつと以前に、私の祖父なんか知つてまゝあ、此處に寶物を隠して、血をかけて、大した約束をしたものださうです」

私達はまた一哩半程行つたが、私は水を飲みたくなつた。

「一寸待つてゐてなされ」とエゴルは言つた。

「水を持つて來ます、すぐ其處に井戸があるて」エゴルは行つて了つて、私は一人になつた。

私は切株の上へ腰を卸して、兩肘を膝へ持たせかけて、長い間凝平としてゐたが、やがて頭を上げて四邊を見廻した、まあ何といふ静かな、けたるい寂寞がみなぎつてゐる事だらう、——いや、寂寞ばかりでは無い、私の身の廻りの物は皆、黙つて、冷かにして、そのうへ嚇し付けてでもゐるやうだ。私の氣は沈んで了つた。と思ふと、その刹那に「死」の呼吸が身にかゝるやうに感じた、其不滅の手がもう私の身に觸つたやうに思つた、八方から身を取まいてゐる松の森のすい込んでゐるも了ひさうな此寂寞の中で、只一つの物音でもひゞいたらば、只一時のそよぎでも起つたらばどう仕様と思つた。怖ろしくて耐らずに私はまた頭を下けて了つた。何人も見てはならない場處を覗き込んだやうで……私は手で眼を隠して了つた——と、不意に、不思議なお告げか何かのやうに、私の過去の生涯が悉く胸に浮んで來た。

私の眼の前を、閃光のやうに、わい／＼騒いだ、呑氣な、喧嘩づきな、氣

の好い、直ぐ笑ふかと思へば、直ぐ泣いた、小児の時の事が過ぎて行つた。と、此度は、漠然とした。不思議な、物心のつきだした、過失だらけな、仕事ばかり初めてものが遂げない、心ばかりあせつて手のつかない、青年の頃が見えて来る、……と、その頃の若い希望を共にしてゐた友達の記憶が繞つて来る……其時、夜の間の電光のやうに、少しばかりの楽しい記憶が閃めいた。すると、其等の影は私の身を押しつぶすやうにして、四邊が一層暗くく……なつて、鈍い何の事もない、單調な月日が走り過ぎる——と、石のやうに、重たく氣落ちして了つた。私は身動きもせず、腰掛けたまゝ、眼の前に時の差別もなく自分の全生涯を見せられたやうに、惶て、凝乎と見詰めた。「あ、此れ迄に何を私は爲たんだらう」、唇は知らずく此痛ましい言を囁いた。「あ、生よ生よ、何の痕跡も残さないて汝は何處へ行つて了つたんだ」。私が掴んでゐた指の間を如何してくとり抜けたのだ、汝が私を欺したのか、

私が汝の呉れた物をつかふ法を知らなかつたのか。そんなはずがあるもんか、此碎片、此みじめなたゞ一ぱいの塵埃、此れが汝の残した總てか、此冷た、澱んだ、やくざな物が、私、その昔の私か、如何して、——心魂は圓滿な幸福に憬れて、少しばかりの、つまらない事は、打捨つて、たゞ待つてゐたのだ、やがて幸福は瀧津瀬となつて漲りちちた——其一滴でも渴いた私の唇を濡さなかつたか。あ、私が心の黄金の糸、一度はあんなにいみじく、樂く鳴り響いたてはないか。——だが、私は汝の奏樂は聞かなかつた、……汝は鳴り初めた、——その時もう汝は碎けて了つたのだ、だが、多分、幸福は、私の生涯の幸福は、私の傍を通つて、ちらつと私に其微笑を見せて行つたのだ、——して、私は其氣高い姿を見とめることが出来なかつたのだ。それとも、また、實際幸福は私の傍へ来て坐つてゐたのを、夢のやうにして忘れて了つたのか。夢のやうにと私は物足らずにくりかへし言つた。

私の傍から逃げていも行くやうに様々な人の顔が、なさけないやうな、手も付けられないやうな思ひをさせて、私の心霊にひらくと見えて来た、
 ……汝達もまた、懐しい戀しい死んだ人々の顔、此怖しい寂寞のなかで私の身の周囲に集つて来ながら、何故さう深く悲しさに黙つてゐるのだ。何處の罅底から浮び上つて来たのだ。汝達のわけのわからない、其目付さを私が讀まなければならぬのか、私に逢ひに来たんか、別れを告げに来たんか、あゝ、希望だの、回想だのと、とても得られる事ではない、何の爲めに斯んな重くるしい時遅れの滴が私の眼から流れるのだらう、あゝ、心は何の爲に、さう痛むのだらう、平和を得なければ、氣を引きしめて別れ際の美しい思や「さらば」とか「いつまでも」とかいつたあのつらい言を退けて了へ振廻るな、思ひ出すな、光明のある處へ行かうなどとはゆめ思ふな、それは青年の楽しむ處だ、希望が春の花環を飾る所、鳩のやうな喜悅が青い翼でか

ける處、戀が日に照らさるゝ露のやうに、恍惚として涙の玉を散らす處だ、幸福だの、信實だの、力だのある處を求めな、——それは吾々の行くべき場處ではない。

「水を持つて来ました」と私は背後でエゴルの響き渡る聲を聞いた、「さあち飲みなさい」。

私は喫驚せずには居られなかつた、此生々した言語は、身體ちう悦しさせてふるはせた。なんの事はない私は知らない、眞黒な深い中へ落込んで行つて、何方を見ても森然としてゐて、只何だか、果てのない悲しい細い唸り聲ばかりの中に居たやうなものだ。…氣も遠くなり、争ふ力もなくなつてゐると、不意に懐しい聲がひいて来て、其力強い手で一曳きに日光の中へ出して呉れたのだ。私は見廻した、そして、案内者の眞面目な正直な顔を見ると、何とも言はず元氣づいた。エゴルは安かな伸びやかな風で私の前に立つてゐ

た。そしていつもの微笑を見せて、濡れた壁に清水一杯を差し出してゐた。……私はのみほした。

「さあ行かう、先きへ立つて呉れ」と私は心から言つた。

私達は出掛けて、夕方まで長い事うろついた。晝の熱は忽ちに消えて、森の中はすぐに冷たく暗くなる。何人でも到底も其中などに居られさうもなし、「行つて了へ、休息をしろぬ物共め」と、松の木が皆、しかめ顔で言ふやうに思はれる。私達は出て来たが、コンドラットを見付けるには、だいぶ暇がかつた。二人で聲を擧げて呼んだが、答へない。と思つてゐると、出し抜けに、沈んだ空氣の静寂な中から、「ウ、ウ、」と呼ぶ聲がする、つい手近の洞穴から聞こえて来るのだ。颯と吹き起つては、また颯と消えて行く風の音にさまたげられて、今迄二人の呼ぶのがコンドラットにはさこえなかつたのだ。

少し隔つた樹の頂上に、風の行く方が見えてゐる、澤山の木の葉が吹きよせられてそのまゝになつてゐて風のあたらない葉とは、違つた姿を見せてゐる。馬車へ乗つて、家へ向つた。私は腰を卸して、前後に揺れながら、濕つたやゝ鋭い空氣を吸つてゐた。さつさままでの幻影や追想も、倦性い、疲れた一つの感じの中に没せられて了つて、出来るだけ早く、温な家へ歸りたい、さうして、茶へクリームを入れてどつさり飲みたい、柔かいしなくする枯草の中へまゐるまつて、飽迄も睡つて睡つて睡りたいと思ひだした。

森林の旅

—(第二日)—

翌朝私達三人は「焼林」へ出掛けて行つた。十年程以前に「林」の中の何エーカーかの地が焼けて了つて、まだ此時までには草木も伸長びて居らず、其處此處に樅だの松だの、若木が芽を出したばかりで、大方の地面は苔と秦皮の外は何も生えてゐない。此「焼林」と云ふのはスフエーリーから先づ九哩と見積がつけてある。此の森の中には様々な種類の草の實が如何にも豊かに繁生してゐるので、松鶏が好んで集つて来る、此松鶏と云ふ奴は和蘭梅とくろ豆とが何よりの好物だ。

私達は何も話もせず馬を驅つて行くと、不意にコンドラットは頭を上げて、

「ア、」と聲を擧げた。「やア、彼處に立てるのはエフレームぢやあるめ……」

オイ、お早う、アレキサンドリッチ」と聲をかけて頭の冠を取つた。

短い黒い襦袢を着た矮少の男が、腰の周圍に繩を巻き付けて、樹の陰から出て来て、車に近づいた。

「やあ、皆はお前を追放したのか」と、コンドラットは訊ねた。

「まあさうすら」と、其農夫は答へて、齒を剃き出して見せた。「俺様のやうなもの何人が押へてゐられるもんだ」

「で、ピオトル、フィリップチは何と言つたんだあ」

「あ、フィリップチか、別に變りは無えよ」

「其様な事言ふな、え、アレキサンドリッチ、——い、か、お前、お前なんかまあ鍋の中で煮られる鴉鳥のやうなものぢやねえか」

「え、ピオトル、フィリップチの奴なら、笑談ぢやねえぜ、あんな奴なら

此方から幾らても打當てやらあ、狼のやうな真似をしてゐるやがつたつて、おしめえにや、犬のやうこそく逃げて行きやがる。——獵にあつてゐるから、え旦那」と出抜に私に問ひかけて、其小さまきりつとした眼を忙はしやうに私の方へ向けたが、直ぐまた視線をば下へ落して了つた。

「あゝさうだ」

「で、何方へ、今頃」

「焼林」までさ」とコンドラッドは言つた。

「焼林」へ行きなされる、野火の用心でもさつしやう」

「えへ？」

「山鶴が澤山居たつて」とさ」其男はうすら笑でもしてゐる様で、コンドラッドには返事もせずと言ひつゞける。だが、彼處までちや行けませえ、真直ぐに行つても十五哩は間違が無え。はあ、いくらエゴールだつて、

ほんまに、森の中は自分の庭だと心得てるエゴールだつて、まさか彼處までちや行けませえ、オーイーエゴール、此金作りめ」と、其男は不意に叫び出した。

「やあ、ち早う、エフレム」とエゴールは口重さうに言つた。

私は好奇心に驅られて此男を見た。此様な不思議な顔は長く見た事がない。長い鋭い鼻、厚い唇、薄い髭。小さな青い眼はきよとくと小鬼の躍つてゐるやうに絶えず動く。手を後方へ廻して臂を張つて、呑氣さうな様子で立つてゐるが、帽子には手も觸れない。

「家へ歸つて行くんか、え？」とコンドラッドは訊ねた。

「家へ、行くつて？。其様な時候ぢやねえや、お前、上天気だ。呑氣で大びらだえ、えお前、冬まぢや、何人だつて家には居ねえや、爐の上へ寝てたつて、犬一匹だつて騒ぎやしねえ。町へ出て行つた時、番頭の奴言やがる、」

「どうか行つて呉れ、レキザンドリッチ、お前は田舎から出て来たばかりだ

で、おいら一等切符をお前にやるからつて……」だがな、可愛さうに、スヤト一の奴等俺様のやうな立派な盗賊は見た事は有んめえ」

コンドラットは笑ひ出した。

「うまい事を云ふな、お前様、ほんとにと、手綱を叩いた。馬共は馳け出した。」

「ウム」とエフレムが言ふと、馬は止まつてしまつた。

コンドラットは此様な悪戯は好まなかつた。

「笑談もいゝ加減にしろ、アレキサンドリッチ」と低い聲で言ふ、「旦那様と一緒に居る事が解らねえか、氣を付けるよ、怒らつしやるぞ」

「勝手にしやがれ、へなちよこ、何を怒るもんでえ、旦那は好い方てえ、ねえ、旦那、一杯此様な可愛さうな奴に奢つてやつてくんせ、飲みさうてげしよう」と肩をば耳の所までいからせながら、齒をざり／＼言はせて、言

ふ。

私は思はず微笑んで、銅貨一つ呉れて、馬を驅り立てるやうにコンドラットに命じた。

「どうも有難え、旦那様」と、エフレムは兵士のやうな態度で、後方から追掛けて聲を揚げた。「どうだ、解つたか、解らんきや、此から先き俺に聞け、コンドラット、氣弱ぢや駄目だぞ、糞度胸が勝た、歸りにや俺の所へ来い、いゝか、三日位は飲みつけ、頸の骨ぐれえ折る奴もあらあ、え、俺の娯て奴又大した奴だし、それに後庭は崖の際だし、え、山鳥め尾ぼを切られるまぢや好い氣になつて居やがれ」と、エフレムは鋭い口笛を吹いて藪の中へ飛び込んで了つた。

「一體如何いふ男だえ」と私はコンドラットに訊ねた。コンドラットは車の前方に坐つて、何か考へてゐるやうな風、頭をば振つてゐた。

「彼男ですか」とコンドラットは答へたが、また下を向いて、「彼男ですか」と繰り返す。

「うむ、お前の村の者か」

「えい、スヤト一の者です、彼様な奴、まあ此百哩四方位獵をなすつたつて、彼様な奴は見られますまい、盜賊で欺騙者で——いや、眞個です。他人の物と名がつくと、屹度彼奴の目をひく、如何様に地の下へ隠くしたつて、彼奴に懸つたらおしまひだ。金なんかは、いくら其上に坐つてゐたつたつて、いつか氣の付かない中に抜かれてしまひまさらあ」

「何て大膽な奴だらう」

「大膽？ さう、彼奴には怖い者は無え、だか御覽なさい、骨相學から言つても彼奴は動物でさ、鼻を見ても解る、(コンドラットは屢々紳士連中の馬車を驅り慣れてゐて、田舎の町などへは度々出掛けた。て、自分のたしな

みを示すべき機會を待つてゐるのだ)「彼奴こそ如何様したつて手に終へ

ねえ、何度引捉へて縛つて牢へやらうたつて——全然駄目です、皆して彼奴

を縛り上げようとすると、まあ斯様な事を云ひくさる、」さあ、何故もつと其脚を緊ねえだ。其奴をもつと、もつと強く、まあそんなことしてゐ

る中に一睡しべえ。そして番人なんかいらねえ、直家へ行いてやらあ、そ

して、まあ如何でしょう、直ぐ歸つて來やがる、眞個に、歸まつて來やがる

でさあ、私達は小兒の時分から此森に慣れてゐるんで、随分と好く知つて

ゐる積でさあね、でも到底も彼奴にや及びましねえ。此夏の事で、彼奴は

アルトゥウヒンからスヤト一まで眞直ぐにづつとやつて來たんでさ、何人

だつて其様な路を知つてゐる者はありません。——まあ三十哩以上はありましようか。そして、又彼奴は蜜盗みて、何人だつて擲ぐれりやしねえし、蜂だつて彼奴にや駄目でさ。そして彼奴の噂が付けない蜂房なんて何

處にもありやしねえでさ」

「ぢや野蜂の巢だつて打捨つては置くまいね」

「いや、私だつて無實の罪は着せやしましねえ、其様な悪い事はまだ爲ますめえ、野蜂の巢つて奴は、あれで神様のものとしてありますけえな。飼ひ蜂の巢つて奴は防ぎも出来てるし、番人も居るし、それで蜜が手には入りや、まあ仕合はせつてもんでさあ、だか、野蜂てやつは、何人も守り手の無え、神様のもんですけえな。只た熊だけは手を出しまさあな」

「でも、彼奴は熊だからな」

とエゴルは言つた。

「あれで女房は貰つたかな」

「え、子もありまさあ、其兒まで盜賊に仕ようてえんでさあ、子の奴も親父の眞似をするし、親父は親父で根氣に其子を慣らしてゐやがる。何日だつ

たか、何處からか舊い銅貨の入れてある壺を盗み出して、森の中へ持つて行つて開墾地へ埋て来て、其子をやつて、「貴様が壺を見付けるまでぢや食物だつて喰はせねえし、家へだつて歸えらせねえぞ」と言ふんでさあ。其子の奴一日一晚森の中にうろついて居やがつたが、それでも、とうとう見付け出しやがつたのでさあ、それにあのエンレンで奴なかく、伶俐い奴で、家に居る時は、氣がさいてゐて、何人だつて及びやしない、食物だつて飲み物だつて、人に嫌な氣なんかさせやしない。場處相應の村踊もやればどんなな娛樂もある。集會なんかに出て来ると——もう、貴方も御承知の私達の村では教會の集會がありますので、——何人だつて、彼奴位精巧な口のきゝ方をする奴はねえ、黙つて聽いてゐやがつて、ちよいとく口を入れて、又黙つてゐる、其ちよいとくがなか／＼利くのです。所が森の中へ来やうものなら、そりや厄介でさあ、何をしやがるか氣が許るされねえのだが、

彼奴が何とか目的を定めたら格別、さも無さあ、自分場處の人にや迷惑を掛けるやうな事は受合ですが、スイヤト、一人に出逢ふと、遠くから「勝手に行きやがれ、畜生、森の悪魔は俺様についてゐるぞ、貴様なんか殺してやらあ」と嗚鳴る——それからが悪い事です」

「まあ、お前なんか何と思ふ、村中かゝつて一人の男を如何も出来ないんか」

「さあ、如何様もんですかなあ、まづ」

「ぢや、全然魔法使ひだな」

何とも判然としねえな。何でも五六日前の事で、蜜を探りに奴さん助祭の家の近邊へ忍んで行くと、助祭先生自分で番を爲てゐたさうです。で、引摺めて、暗の中で甚く喰はせた。すると、後でエフレムの言ふのに、「だ

が、お前の今擲つたのは何人だと思ふ、助祭は聲で何人だか判然つたので、もう全く聲も出なくなつて了つた。するとエフレムの奴「えお前さん、斯様な事して置いてさう好い氣になつちや居られめえよ、助祭先生耐らずに足許へ身を投げて、「どうしても爲て呉れ、お前の思ふなりに」と言ふと、「いや、俺の好き勝手な時にしてやらあ」と云ふのです。そして、まあ如何でしょう、其日から助祭先生、焼傷でもしたやうに、幽霊のやうになつてゐるつゝ廻る。そして言ふのに、「元氣も何も抜き取られて了つた、——身に着いてゐる山賊で諺があるが、實際怖ろしいものだ」彼奴と助祭とはまづ斯様工合でした。

「其の助祭先生屹度馬鹿に違ひない」と私は言つた。

「馬鹿ですつて、だが、此様な事も有つたんですが、如何様でしょう。一度エフレムの野郎を捉まへると云ふ布令が出た。代理巡査一人、随分抜目

の無い人でしたがな、外に若い衆十二三人と森の中へ彼奴を捉へに出掛け
て行つたんでさあな、皆して捜してゐると、奴さん向からやつて来た、
…すると何人か一人が聲を出して「来たく、捉めろ、縛れ」と喚き散
らすのと、エフレムは森の中へ馳け込んで、まあ二本指位の太さの枝を折つ
て、今度は路へ蹴り出した。凄く怖ろしい顔付きて、づらつと一わたり見
渡すと、大将のやうに號令を掛けたものでさ、「坐れ」と云ふと、皆な一時
に坐つて了ふ。何奴だ、俺を捉めろ、縛れつて言つた奴は、セルヨウか、
貴様だな。「すると其男は直ぐ様飛び上つて馳け出した。…エフレムは
追掛ける。尻べたから枝を振りながら…まあ一哩も追つたかと思ふと、
とうとう其奴を擲倒して了つたんでさあ。だか、後になつてからは其男は
常時も口惜がつて「あ、彼奴を白状させて呉れなかつたのが何より残念
だ」と言つてゐるんでさあ。それが丁度ヒリッブ上人の日の前でしたがらな。

で、それから間もなく其代理巡査は交はつて了つたが、やつぱり何日でも
同じ事であらう
「何故皆な左様彼奴に負てるんだらう」
「さあ、それが、まあ……」
「彼奴は、お前達を威して、氣儘にしてゐるんだな」
「威かして、如何にも、……何人でも威かすんでさあ、そして、彼奴の工
夫の巧い事と言つたら驚げちまひまさ、そりや旦那、私が一度森で彼奴に
出くわしたのです、雨のどしや降りに降つてゐる時でしてね、私はこつそり忍
んで行かうとすると、……奴さん見付けて、斯様な風に手招きするので
す、「おい、来て、コンドラッド、怖え事だねえ、森の中では如何やつて
雨を乾かすか見せてやらあ」と言ふのでさ、側へ行くと、樅の樹の下へ坐つ
て、濡れた枝で火を燃すのです。煙が登つて樅の樹へからみつく、ほたほ

た落ちる雨の滴が、其煙の爲め支へられると言つたわけ、私は魂消ちまひました。

又一度なんか此様な事をやつたんでさあ、(コンドラットは笑ひ出した)、真個に可笑な事をやる奴で、皆して挽部屋で燕麥を打つてゐたんでさあ、所が終まな、残りの一積を掻き集める暇がねえ、仕様無えもんで、終夜其傍へ番人を二人付けて置いたんでさ、所が、其二人がさう豪氣な奴等ぢや無えので、奴さん達坐つて何かへちや／＼喋つてゐると、エフレムは、シヤッを出して、袂の中へ藪を一ぱいつめ込んで、袖口を縛り、頭から引冠つて、其儘こつそり挽部屋へ忍込み、隅の方からぬつと出て、其角を覗かせたもんでさ。すると一人が言ふのに「見たか」「ムウ」と云つたが、それさう聲も出ない、……すると外圍がギイ／＼云つて、見るともう二人は影も形も無い。エフレムは存分袋の中へ燕麥をすくひ込んで、家へ引きさずつて行

つたでさ、彼奴後になりてから自分で話したんですがね、二人はさん／＼に耻をか／＼せられたんで、真個に仕様のない奴でさ」

コンドラットは復た笑つた。そしてエゴルも微笑を洩らした。「垣根がギイ／＼いつで、それつきりか」とエゴルは口を入れる。「さう、それつきり二人の影も形も見えねえのさ」とコンドラットはいふ。「一目見て直ぐ様逃げちまつたんだな」

私達は皆な復た黙つて了つた。不意にコンドラットは立ち上つて、

「あゝ、しまつた、と叫びだした」ありあ、たしかに野火ぢあねえかな」

「何處に、何處に、私達は訊いた。」

「彼處に、そら、向ふの方に、行く方に……あ、野火だ。エフレムが彼處に、エフレムが、——あゝ、彼奴先刻言やがつた。が、あの業畜生のしやがつた事に違えねえ……」

私はコンドラットが指した方を一見見た。私達の前方二三哩、低い樅の若木の緑の線の背後に暗黒色の濃い煙の柱が地から静かに立ちのぼつて、次第次第に纏はりつ巻きつ、笠雲の形となる。其の右に左に一層小さな、一層白い幾多の煙ののぼるのが目には入る。

農夫が一人眞赤になつて、汗みどろでシャツの一枚で、赧顔の上へ頭髪をふり亂して、私達の方へ眞直に馬を馳けさせて来たが、やうやうの事で、前へくとあがく其馬をば制して止めた。

「オ、イ仲間」と呼吸をきりながら訊く、「お前、山番には逢はなかつたか。」

「いや、逢はねえぞ、どうしたと、森中野火か」

「ウム、俺等皆を集めなきやなんえね、トロスノーまででも燃えてさや、大變だ」

農夫は肘へ力を籠めて綱を曳いて、踵で馬の兩脇腹を押すと……馬は泡

を吹いて駆け出した。

コンドラットも亦二頭の馬に鞭を加へた。私達は眞直に煙の方へ馬を馳つた。煙は次第次第に廣くなる、所々其煙は黒くなつて高く立ちのぼる。近くなればなる程、煙の外廓は何處までともはつきりしない。空中が全く雲で覆はれて了つて、強い物の燃える香りがする。此處彼處樹の間には日光が射して奇妙に不思議に慄へるやうに見えて、青白く、紅い、火炎の舌がまづ閃めく。

「やあ、まあ有難てえ、」とコンドラットは言つた。「此奴は、只の「野火」のやうだ」

「何に」

「野火」ですか、地面の上を燃やして行く奴てさあ、此が地面の下を燃す奴なら、それを防ぐに骨が折れます。まる三尺も地の下まで燃えてゐる時

なんか、てんで手が付けられねえ、其様な時一番好いのは、——溝を堀るんでさあね、——それが容易だと思はつしやるか。だがまあ「野火」なら大した事は無え、草を焦し、枯葉を焼く位で、森は却つて善くなるかも知れねえ。ウー、だか、まあ御覽じ、あの火を——

私達は殆んど火の際まで乗りつけたので、私は降りて火の所まで行つた。別に危険も、困難もない。火は風に逆らつて、まばらな松の樹の上を走る、高低定りなき線をなして、もつと適切に言ふと、深い谷をくぐつた、うねつた線をなして走る。煙は風に吹き搔はれて行く。コンドラットの云ふ事は違つて居ない。實際只の野火だ、只草の葉を焦がして、焼き終らないうちに通つて行つて了ふ。後には黒い煙が立つてゐるが、燻る程でも無い。だが又、折々枯木や枝の一ぱいつまつてゐる穴の所へ火が来ると、不意に、際立つた、喰つてかゝりでもするやうな響を立て、長い戦慄る形をして燃えあがるが、

すぐまた静まつて、先のやうな、シウツ、シシツ、バチ、バチと言ふ音を立て、走つて行く。

私は一度ならず、櫛の敷が、枯れ葉が喰付いたまゝで、周圍だけは縁取るが、根元が只だ少し焦げただけで、全然火のつかずに居るのを見た。實際、私には何故枯葉には火が付かないか解らなかつた。コンドラットは私に説明して、火が地上に爬ふからだ。「火が熾つて居ないのだ」と言つて聞かせた。

「でも同じ火ぢやないか」と私は争つた。

「たゞの野火です」とコンドラットは繰り返した。だが、火は地上を爬つてゐるので、其力はあなどれない。野兎はうる／＼して飛び廻り、惶て、火の傍まで復た飛び返つたり、鳥は煙の中へ落ちて、ぐる／＼廻つてゐる。馬は後方へ振り返つて嘶く、森全體がぶす／＼言つてゐる。——人も不意に顔の有る熱の爲めに不安を感じて来る……

「何を見てゐなさるだね」と、エゴルは突然私の背後から言つた。「まあ、まあ、まあ、まゐりませう」

「でも、何處へ行くのだ。」とコンドラットは訊ねた。

「左の方へ乾いた澤の上を、大丈夫行ける」

私達は左手へ向つて、通つて行つた。折々馬も車も随分通行には困つたが。

終日私達は、焼林をうろつゝ廻つた。夕方になつて——また太陽は空に

紅くなり初めなかつたが、樹々の影は既に長く音無く地上に敷いて、草葉の中には、露置く前の冷たさが身に沁みて来た——私は道傍の車の傍に身を横にしてゐた。コンドラットは馬に牧を畜つた後で、悠々と馬の支度をしてゐる。私は前の日の寂しい妄想を思ひ起した。

四邊の物は皆前の日の夕方と同じく静寂であつたが、今日は眼前に魂も消えるやうな、壓せらるゝ森はない。乾いた苔の上に、真紅の草の葉の上に、

路端の軽い塵の上に、若い樺の樹の繊細な幹や、其清らかな小さな葉へ落ち行く日の、もう焼き付るやうな力の無い、澄んだ柔かな光が射し、物々が休んで、取鎮めるやうな冷たさの中に洗んで行く。何物もまだ眠らぬ。いが、有ゆる物は、夕方と夜との元氣付ける睡眠を迎へる用意をしてゐる。萬物が皆人に向つて、「休め、吾々の同胞よ、汝の前に近き睡を迎へて、かにかに呼吸して、悲しむなれ」と言ふやうに思はれる。

私は頭を上げた。すると、細い小枝の端に、濃い緑色の頭をした、長い身軀の、四本の透き通つた翼を持つた大きな蠅が一羽止つてゐる。空想勝ちな佛蘭西人は此を「少女蠅」と呼ぶが、風流氣のない我々は「桶の手」と言つてゐる。長い事、殆ど一時間以上も、私は凝乎と其蠅を見てゐた。日の光りを全身に浴びて、身動きもしない。只折々彼方此方頭を向けたり、羽を揚げて振つたりしてゐるばかり……只それだけだ。其蠅を見てゐると、私は不圖

自然の生命と、多くの人々には未だ解らないが、明かな誤のない其神祕の意味を會得したやうに思つた。

とり鎮めた平穩な生活力、騒がない拘束を加へた官能力の使用、有ゆる生物各自の健康の均勢、——此處に造化の眞根柢がある。自然が由つて立ち、由つて支へて行く不變の方則がある。何物でも此水平を越えて走るときは、上へ走るも、下へ行くも——何れも差別はないが——自然は價値なきものとして此を捨て去つて了ふ。多の昆蟲は互に相愛する悦びを知ると同時に體は死んで了ふ。此均勢を破るからだ。病獸は藪の繁みへ飛び込んで、其處で獨りて死んで了ふ。其獸には最早萬物を平等に照らす日光を仰ぎ見たり、或は大氣を呼吸してゐる權利が自分に無いと感ずるやうに思はれる。即ち此ものには生きるべき權利が無いのだ。——人間は自分の過失の爲めに又は他人の過失の爲に病を得て世を送るなら、——少なくとも、如何に平靜にしてゐるべきかを知る義務がある。

「さあ、エゴル」とコンドラットは不意に叫んだ。もう自分は馭者臺へ手綱を執つて、振つたり、ひねつたりしてゐる。「さあ來て乗れ、何を其處に考へてゐるだ、また牛の事だな」

「牛の事つて、何に、牛の事つて、私は繰り返し訊いて、エゴルの方を見た。エゴルは常時のやうに穩かに靜然としてゐる、が確に深く考へ込んでゐるやうで、もう暗くなりかゝつて來た遠くの方を眺め入つてゐた。

「お知りぢや無えてすか」とコンドラットは答へた。「此人の残つてゐた一匹さりの牛が昨夜死んで了つたんでさあ。氣の毒な事つて、まあ如何しようと思つてゐるんだい……」

エゴルは黙つて馭者臺へ腰を卸して、馬を驅り立てた。「此男は如何に平靜に忍ぶべきかを知つてゐる」と私は思つた。

ビエジンの曠野

爽かな天氣の、幾日も續いた後にばかり見られるやうな、華やかな七月のある日の事であつた。明方から空は澄み渡つて、日出でさへ火炎のやうにはなく、空には柔な、蓄薇色だつた、ほかしが一面に漂つてゐた。太陽は息をも窒める大早の折の、燃え立つやうな紅の、暑さうな色でもなく、又嵐の前の、鈍い紫だつたのでもない。麗かに、静に、一條の細い雲の中から、穩に登つて来て、鮮に下界を照すかと思ふと、又ライラック色の霧の裡に隠れて了ふ。ひらひら雲のほのかな上縁の邊りは、さながら小さな蛇のひらめくやうで、其眩ゆさは磨き上げた銀さながらだ。と見ると日影が復び洩れ出して、何か嚴かな喜でもあるやうに、舞ながら其軌道を登つて来る。眞晝頃になると、空高く、柔な白い縁をつけた灰色が、つた、金色の

輪形の雲の一群の懸るのが、其頃の習ひであるが、其れがさながら、漲る流の中に點在してゐる島のやうに、隙間もなく廣々とした、深く透徹るやうな蒼色の中に動くともなく動いてゐる。そして空から遙か降つて来ては、漂ひながら群がりよると、やがて其間に、少しも空の碧も見られぬ時があるが、また其が照り輝くと、殆ど空と見分け難い程の青色となる事もある。地平線の上のほのかな青白いリラック色は終日變らない、四邊のさまは何時と同じ事で、何處にも群がつた黒ずんだ嵐のけはひなどは少しも見えぬ。唯何處か空から、青光りがあたりを散つて来る、夫れは目に見えないほどの雨のふりかゝるので。夕方になると、此等の雲は皆消えて、其最後に黒色を帯びた烟のやうな、もや／＼雲が入日に向つて石竹色の縞を染めて残つてゐる。太陽はまた登つて来た時のやうに静かに沈んで行き、其あとには深紅の光が小暗い地上を長くたゆたつて、大空には夕の星がまた、さ初める、丁度

氣なしに持出した蠟燭の火が静かに風にゆれるやうだ。

いつたい、斯様な日は、雲といふ雲は皆柔らいて、光つてはゐるがさう烈しく照輝かない、四邊の物は皆な身に沁みるやうに懐しさが充ち満ちてゐて、時にはまた氣候の非常に暑い事も有つて、野原の坂の有るあたりは、湯氣の騰る位に思はるゝ事もあるが、風は此蒸すやうな暑さを吹き消して、塵の龍巻を起しながら——其は好い天氣の定つた験である——道に沿ひ野を横ぎり、白い柱となつて登つてゆく。澄んだ乾いた空氣の中には、苦蓬や、ライ麥の花や、蕎麥の薫が充ち満ちて、夜となる一時間ばかり前までも、空氣の中には少しも濕氣がない、農夫等が麥刈時に望むのは、かういふ爽な天氣である。

丁度斯様な鮮な日の事で、私はツエラ州のチセルン地方へ松鷄を打ちに出掛けた。さて出掛けて行つてから暫くすると、獲物もかなり有つたので、

一ぱいになつた獲物袋は無残にも私の肩に喰入るやうであつた。が、其時ほもう夕方の暑さも薄らぐ頃で、黄昏の冷い影が次第に濃なつて、入日の光はもう見えないがまた何處となく明かるい大空の上へ擴がり出した。そこで私もう歸らうと思ひさめて、足疾やに藪の長く續いた廣場を横ぎり、ある小山へ登つた。右の方には樅の樹の森、遠くの方には小さい白い寺の在る、いつもの平原のさまを胸にえがきながら向の方を見渡した。すると、どうしたのか私の前には全く見馴れない新しい景色が横はつてゐる。

脚下からは一條の細い谿路が遠く續いて、真直に向の方には、白楊の林が厚い壁のやうになつて立つてゐる。私は當惑して立すくんだまゝ、あたりを見廻した。「あゝ、しまつた、右の方へ來過ぎたんだ」と、自分ながら其失敗に驚いて、急ぎて其小山を下り、やがて氣味の悪い、厚く立置めた夜霧の中に衝入つた。まるで穴藏の中へても下りて行くやうな氣がする、谿の底のた

け高い草はもう露にぬれて、滑かなテーブル掛のやうに白く、其中を行のは
いかにも氣味悪さうに見える。そこで、私は他の方へ向つて、白楊の林に沿
ひ、左へ左へと急ぎ出した。

蝙蝠はもう、眠つたやうに静かな樹頂に輪をかけながら、澄で静かな空の
上を、恠げにひらひらと飛んでゐる。歸り遅れた若鷹は、上の方を眞一文字に
横ぎつて、其巢の方へ風を截つて飛んで行く。眞直ぐに此方へ行つたら、間も
無く途に出るだらう、と思つた。併しもう一里位は來た。

私は遂に森の端に達した、けれど、其處に途らしい者も無い、只何だんか低
い藪が、たけ高い草と茂り合つて遠く前に廣がつてゐるばかり、遙か遙か向の方
には、一帶の荒原の連てゐるのが、眼にはいつて來る。私は復た立止まつて、
はて、何處だらうと、今日一日何處をどうして歩き廻つてゐたか努めて思出
さうとした。ア、此はバラヒンの藪だと聲を擧げた。フム、さうだ、すると

此はシンドイーフの森に異ひない、けれど如何して斯様所まで來たんだらう、
斯様に遠く、不思議だ、すると此度は右の方へ、右の方へと行けばよいのか
知ら。

私は藪の中を右へ右へと進んだ。すると程なく夜になつて、風の雲のや
うにあたりは小暗く、夕の霞がかゝつて來て闇はもう一面に立置めて、頭の上
からも掩ひかゝる、私はわづかに、人に踏まれた草の小徑のやうな所を、
一心に前の方ばかり見つめながら辿つて行つた。するともう四邊は眞闇で、
しんとして、折々鶉の叫聲が聞えるばかり、何か小さな夜の鳥が聲も立て
ず、柔な翼で地上を私の身邊近くひらりと舞つてゐて、驚いてはまた向
の方へ飛ぶ。遂に藪の向の端まで辿り着いて、其縁を野原に沿つて歩いて行く
だ。今となつては、もう遠くの物は見分け難く、野は只茫乎としてほの白く、其
向は眞闇で、其闇暗が一步一步大きな團となつて近づいて來るやうに見える、

自分の足音は、一層冷たくなつて来た空氣の中に響を立て、光のない大空は復蒼くなり初めた。然し此は只夜の蒼色にすぎない、さゝやかな星影が其中にまたゝいてゐるばかりだ。

私が森だと計り思つてゐたのは、暗い圓い丘であつた。「けれど、一體何處なんだから、」と聲高く繰返しながら三度目まで立止まつて、自分の居る所をばよくよく見廻した。私のそばには英國種にあか犬のディアンカが居る。此獸は確か四足獸の中では、尤も賢いものゝやうに思はれる、けれど此賢い動物も、只其尾を振り物憂げに目たゞさする計りて、何も好い助言も與へない。私は犬が私を疎ましさうに見てゐるやうな氣がしたので、不意に其行くべき方でも氣付いたかのやうに、無茶苦茶に前へ衝進して、其の丘を駆け下りた。すると今度は左様深くは無いが、四邊が岩で立ち截られた洞の中へはいつて仕舞た。すると不思議な感じが身に起て来る、此洞は宛然網袋其

まして次第に傾斜するやうに見える。其底には大きな白い石が幾つも上を向て立てゐて、何か秘密の會議を開く爲めに此處へ隠れたかのやうだ。其中はしんとして真闇やみ、上から覆ひかゝつてゐる空はいやに寂びしくまた不思議なやうに見えて、氣も心も沈んでしまふ、小さな獸が其石の間に弱さうな悲しさうな聲で鳴いてゐる。仕方が無い、また舊の小山まで急いで歸つた。此時までは未だ歸路を求める希望は全然捨てはしなかつたが、遂全く途を失つたものと思さめた。四邊殆んど闇に覆はれ盡したので、何も目當にする物もなく、只星の光をたよりに無やみに進んで行た。辛うじて一步一步ひきづりながら、凡そ半時間も行つたらう。私は一生此様寂い境に出會つた事はない、何處を見ても一點の光もなく、そよとの音も聞えない、丘陵は起伏し、曠原は果し無く續き、幾多の藪は進むにつれて、自分の鼻先へ地から突出るやうに思はれた。私は歩みながら、仕方がない、朝迄何處かに眠てやらう

と思定めた、其時不意に氣が付くと自分の身はいつしか恐ろしい斷崖の上に立つて居た。

あげた足を急いで後へ引いて、茫としてゐる闇の中をすかして見ると、脚下には廣漠たる平原が横たはつてゐる、一道の長江が現れ出て、半圓形を畫きながら向の縁を劃してゐる、其流の末は其處此處猶かすかな鐵色の光となつてほのめいてゐる。氣がついて見ると、私の今のゐる丘は急に盡きてしまつて、殆どのめり出したやうな斷崖になり、其側面は紺青な大空に向つて衝立つてゐる。其直下、河も唯黒く、鏡のやうに緩やかになつてゐる此邊りの平原と、此斷崖とに包まれてゐる一角、即ち丘の風下に當つて、二つの火が見える、其が立ち并んで燦たりまた赤い炎を立てたりしてゐる。また其を取圍んでゐる人々の、火を吹き立てる度にゆれる影や、時には、ちりれ毛の小さな頭が光りに照らされて見えて來た。

私は漸く何處へ來たのか了解つた。此平原はビエジンの原と謂つて、自分等狩仲間には能く知られてゐる所だ。併し夫にしても家へ歸る見込はない、夜なのに、足は勞れきつてすくんで仕舞てゐる。そこで私はあの火の處まで下りて行つて、此等の人と一緒に夜を待ち明さうと思ひさめた。其人等は羊曳らしいと思つたので。私は巧に其丘を下りた。が、未だ其擱んでゐた最後の枝を離すか離さないに、突然二匹の大きな白い龍犬が嚙付く様に吠えながら此方に向つて飛んで來た、すると焚火のあたりからは響くやうな小兒の聲がして、二三の小兒が急いで地面から立ち上つた。私は聲をあげて彼等の間に答へ返した。すると彼等は私の方へ馳せて來て直ぐ犬を呼び返す、犬はデアアンカの姿を見て一層烈く激したのだ。私は遂に其小兒等の所までやつて來た。

先刻焚火の周圍に坐つて居る様子で、羊追ひだらうと思つたのは私の誤り

て、彼等はたゞ隣村の百姓の小兒等て馬追ひをやつてゐるのだ。夏の暑い時分には私等と同じ此等の小兒も、夜になると馬を廣い野原で牧飼ふので。晝の間は細だの蚊だのが五月繩てたまらない、それで夕方になると彼等の一群は馬を廣場へ追出して、翌早朝に歸て来る。此が又其百姓の小兒等に取ては中々大した仕事である。頭には何もかぶらず、時には亦古びた毛皮の帽子位で、此者共は極めて元氣の好い仔馬に乗て、愉快さうに叫聲を擧げたり、叱ッ叱ッと言はせたり、また聲高く笑つたりして、手足を振り、躍り上つてかけさせる。細かい塵が黄色い雲のやうに立上り道に沿うて舞つて行き、蹄の音は一つとなつて遠く響き、馬も皆其耳を振立て、競争し、最先には毛の深い栗毛の馬が尾を上げ、鬃を亂だし、絶えず足並を更へながら進んで行くのだ。私は兒童等に途に迷つた事を話して皆と一緒に坐り込だ。彼等は何處から來たかなどと聞いてから、暫く黙然てゐて、また向をむいてしまふ、そして

て少しすると復話したす。私は若芽の馬に囁れて仕まつた藪の下に横になつて四邊のさまを眺め初めた。宛然不思議な晝のやうだ、焚火の周圍には光の紅い輪が震へて、暗の後景につままれていまにも消えてゆくかと思はれ、炎は絶えず燃え立つて此輪の上を輝かし、また光のさゝやかな舌は乾いた小枝を甜めて、また消えて仕まひさうになると、今度は長い薄い影が直ぐ此火の際まで詰寄せて、更る更る光と闇と戦かつてゐる。折々炎が燃え沈んで光の輪が全く縮まると思ふと、不意に押寄せるやうな暗の中から、斑な栗色が、つた白のやうな馬の頭が現はれて、黒い眼で私等の方をぢつと見つめて、急がしさうに長い草を嚼みながら又次第に後ずさつて、やがて消えて仕舞ふ。と思ふと、其の嚼む音と鼻息する音とが聞えるばかり、焚火してゐる圓居からは、闇の中に何事が起つたか氣付く事はむづかしい。夫は手近の物も皆悉く黒い幃に裁切られたやうに見えるから、小山や森を超えて

彼方、地平線上は長く黒く朦朧として目にはいる。

眞黒ではあるが雲のない大空は、測り難い、限ない勝誇つたやうな不思議な威厳を見せて私等に臨んでゐる。何人でも其特殊な、歴するやうな、而もまた爽な匂のする、ロシヤの夏の夜の大原の薫を呼吸する者は、必ず心地よく壓付けらるゝやうな氣持になるに違ない。只何かの響がかすかにあたり響くばかりだ、夫は折々程近い洪河から、聞こえて来る大魚の潑刺として波に躍る音と、其漣波が岸をうつと、軽やかにゆれてさら〜と鳴る蘆の葉ずれの音とである。焚火はひとり消えやうとしてはばち〜と燃えてゐる。

兒童等は其周圍に坐り、先に私に喰付かうとあせつた二つの犬も傍にゐる、此犬どもは長い間私の姿を見つめてゐて、氣を休める事ができなかつたが、今は睡さうに瞬きしながら火を見つめて、折々自分等の威厳を保たうと思つてゐるやうに、初めには長く吠えて、次ぎには其望がとげられないのを悲

むかの様に少しく叫びた。さて其處には皆て五人の小兒がゐた。フエディア、バフルーサ、イルーサ、ユステア、及びファンヤ、私は小兒等の話合ふので其名を知つたのだ、此から讀者諸君に彼等を紹介しましょう。

皆の中、先づ一番年かसानのがフエディア、見た所丁度十四位で見かけも好く逞しく、快活さうで、稍小形で、縮れ毛で、輝いた眼で、わざとてはないが絶えず愉快さうに、微笑してゐる。此兒はどう見てもかなり豊かな家の兒で、是非とも左様するにも及ばないのに、樂み半分に、野原で馬を乗廻してゐるのだ。黄色な縁取つた灰色の花布のシャツを着て、其頸の周りに、投掛け短衣の新い上着は、其狭い肩から滑り落ちさうになつて居る、其長靴は脚の中程まで來てゐるが、確か自分のもので爺の借物では無いらし。二番目の兒は、バブルーサ、縮れた黒い髪の毛と、灰色の眼とを持つた、頬骨の廣い、小さな痘痕のある、青白い顔の、大きいが併し能く結だ口で、頭は大きくよく

いふビール桶頭とでもいひさうな、其姿は角張つてゐて又鈍さうで、どうも見た所の好い兒ではない。とまづ言へようが、併し私は此兒が好きだ。如何にも賢さうで又率直なやうだ。其聲にもどこか強い響がある。着て居る着物も何と取立て、言ふ程の事も無い、只手織のシャツ、と補片のさしたズボンをしてゐる。

三番目の兒はイルーサ、どつちかと言へば無趣味な長い顔をしてゐて、近眼で、其に釣針のやうに曲つた鼻をしてゐる。其が爲め何となく鈍いやうな、意地悪いやうな、不愉快なやうに見え、眉には常に皺を寄せて、絶えず火の光を瞬きしてゐる。亞麻色した白ぼい髪が、羊毛の帽子の下から出て居て、其帽子をば又兩手で耳の所まで引下げてゐる。新しい靴の靴と脚絆とをばいて、紐を三重回して、さつぱりした黒粗い上着をしつくり結へ付けてゐる。此兒もバフルーサも共に十二位より上とは思はれない。

四番目のスコティアと云ふ十位の兒は、何となく考へ込だやうな又悲さうな風をして居るので、妙に思はれた。其顔には小さな薄痘が一ぱいで、栗鼠の頤のやうに突出た下頤、薄くて有るか無いかわからないやうな唇、其黒い大きな眼には流れるやうな光が輝いてゐて、何か口では言はれない事を、——少なくとも彼の口からは言はれない事を、——表はすかのやうに思はれる。此兒は極く小さな弱さうな兒で、何方かと言へば貧い方の風をしてゐる。他にも一人ファンヤ、此兒は私は初め氣が付かなかつたが、地の上に粗布を四角にして、其中に安らかに括まつてゐる、只時々其粗布の下から縮毛の藍色の頭をもちあげる、此兒はせいせい七つ位だ。

そこで私は傍の敷の下に臥て小兒等を見てゐた。小さな鍋が一つの火の上に懸つてゐて、其中に馬鈴薯が煮たつてゐる。バフルーサは其に氣を付けて、膝をついて沸騰してゐる湯の中に木の片を差入れて攪回しながら鹽梅を見てゐる。

る。フェディアは肘をついて横になり其上衣の縁を擦つてゐた、イルーサは
 コステアの側に坐つて、絶えず強く目たゝししながら、其頭を物憂げに垂
 れたり又遠くの方を眺めたり、ファンヤは其粗布の下で動かさない。私は眠
 らうとした。小兒等は復少しづゝ話し初める。

初めは明日の仕事のことだの、馬の事だの種々な雑談をしてゐたが、急に
 フェディアはイルーサの方へ向つて、一旦とだえてゐた談を復た仕初めたと云
 ふ風に問ひだした。「一體お前は其ドモボイ（化物）を見たのか」

「イヤ見やしねい、誰にだつて見られるもんか」と弱い嗔聲でイルーサは
 答へた。其聲はいかにも能く其顔に似合つてゐる。「俺は其聲を聞いた、けれ
 ど夫は俺一人ぢや無い」

「其奴は一體何處に住んでゐるんだ、お前の村？」とバフルーサは聞いた。
 「古い紙漉小屋の中」

「どうしてお前其小屋へ行つた？」とそりや行くが、アフトニスカ兄も俺も
 紙漉屋だもの」

「ウム、紙漉屋の手代だつたな」

「夫でどうして聞いた？」とフェディアは問うた。「マア斯様さ、俺と兄と一緒に
 ミイエフスカのフォードルだの、横目のインエスカだの、レッドヒルスから來
 た他のイフアスカだの、其にスオールコフのイフアスカだの他に未だいくら
 も小兒が居た。皆なで十人、其晩其紙漉小屋で明すやうになつた。實は管督
 のナザロフが俺等を泊めなければ左様はならなかつたのだが、其奴が貴様た
 ち家へ歸るなんて何故其様暇つぶしな事をするんだ、明朝の仕事がもうさま
 つてゐる、行つちやいかんぞ、と言ふんだもの。夫で俺等其處に泊つて皆と
 一緒に臥て居た。するとアフトニスカ兄が「小兒達、もうお化が來る時分
 だぞ」と言ひ出した。すると其を言つて仕舞つたか仕舞はないに、何か二階

の上で歩み出した。其處には車がある。沈黙で聽いてゐると其れが歩く度に板がキイ／＼といつて撓むやうに見える。もう通り過ぎたと思ふと不意に車から水がポタリポタリと落ちだした。すると水道の井堰は下してあつたが、車がガタリガタリと回り初める。誰か井堰を上げて水を入れたらうか、不思議だと思つたが、車はバタバタと少し回つて又止まつて仕まつた。と思ふと今度は、二階の戸口までやつて来て、其段々を降り初める。こつそりと、階子段は何かギーギイと云ふやうだつた。すると……俺等の臥て居る戸口迄やつて来て沈黙で立つてゐる……と思ふと、不意に戸がスウ／＼と開いた。俺等は震へ上つて四邊を見廻はした。けれど何も居ない。……所がどうだ。不急に一ツの桶に掛てあつた網が動きたす、立上つて前にのめつて空中を動いて行く、誰か其奴を動かすやうだ。すると復た舊の所へ返つて來ると、今度はまた外の桶の動き出し、懸てあつた鉤が釘からはづれたり、又舊の所

へもどつたりする。何人か戸の所まで來たやうだと思ふと、急に咳をしたり、羊のやうに咽んだりするが、聲は一層大きい、……俺等皆な一緒に重り合つて臥て居た、……其時の恐怖つたら……。

「一體何だつて咳したんだらう？」とパフェルが囁いた。「解かるもんか、多分何か悲いんだらう」

暫時の間、皆沈黙でしまつた。

「オイも馬鈴薯が煮えたか？」とフェディアが訊くと、パフルーサは鹽梅を見て「イア未だ生だ……オ、あの音」と彼は其顔を河の方へ向けて「鹹魚に異ひない……そら、星が飛んだ」

「何か俺も話さうか、皆な？、此間阿爺から聞いた話を聞かないか」と徹るやうな聲でフェディアが話し出した。「ウム聞かう」と兄貴振つた風にフェディアが言つた。

「皆な、ガフリヤを知て居るだらう、あの大村の大工を」ウム俺等知てる」
 「彼奴は何故あんなに始終悲しうに、何も謂はないてゐるのか知てるか。知るまいが其のいはれを話さうや。或日の事で、彼奴が森の木の實を拾ひに行つたさうだ。そこで其木の實を拾つてゐる中に遂に途をまちがへた。けれど猶かまはず進んで行つてた。何處へ行くんだか神様の外は何人も知らない、やたらに進んで行つたけれど少しも見當が付かない。どうしても途が判然らない。そこでとうとう夜になつた。仕方なく、ある樹の下へ坐り込めて朝迄待たうと思ひ、其儘眠り初めて、ツィぐつすりやらうとすると、不意に何人か自分を呼んだ。驚いて四邊を見回すけれど何人もゐない。復眠ると復呼ばれる。二三度四邊を能く見ると、自分の前の木の枝にルツサルカ（女の化物）が坐つてゐて、身をゆすり、茲處まで来いと呼びながら、腹筋のよれる位笑ひつけてゐる、……目が輝渡つて何物でも判然わかる位に照らしてゐた。そこ

て其の女はカフリヤを呼んだ、枝の上に坐つて居て眞白に光つてゐる、丁度小さな鯉だの鱈だのローチだの（皆眞白い銀色した魚の名の）やうに眞白く銀色をしてゐた。カフリヤ大工は殆て氣を喪つたが、此女は絶えず自分の處へ来いと言つて、此様な工合に手招してゐる。するとカフリヤは起ち上つて、もう少して其妖怪の處へ行かうとしたが、神様が助けなすつたに違がない。彼奴は斯うして十字を切つた、……が夫をするには非常に骨が折れたさうだ。俺の手は宛然石のやうだ、動かないだらうかと言つた……オ恐ろしい魔物……彼奴が左様いふやうに十字を切ると思ふと、笑を止めて急に呼びかけた。サウ其妖怪が聲をあげて、髪の毛で目を拭いたが其が宛然眞青い麻のやうだ。カフリヤは確乎と其女を見つめて、何を泣くんだい妖怪めといふと、其妖怪は斯様な風に話した。若しお前が十字なんか切らなかつたら一生面白く私と一處に居る事が出来たらうに、切ない、御前の十字を切つたのは

眞實に悲い、だが私一人切ぢやない、お前も一生泣くだ。と斯様言つたかと思ふと、其女はもう消えて仕舞つた。するとカフリラは其森から出て来る事が出来た。が夫からと云ふものは彼奴始終悲しうにしてゐるのだ、皆なが見る通りに」

「ウム」とフディアは暫して言つた。「だって如何して森の悪魔なんかクリスト宗の人を苦める事が出来るものか、カフリラだつて云ふ事を聞かなかつたのだ」

「そしてね」とコスティアは言つた「カフリラは其女の聲が蝦蟆の聲のやうに、突き徹すやうな凄い聲だつたと言つたよ」

「お前の爺さんが自分でお前に話たのか」とフディアは續けた「フム俺も二階に臥て居て皆な聞いてたんだ」

「不思議な話だ、何故彼奴は其様な目に逢はなきやならないのだらう……」

俺さう思ふな、其女彼奴を好いたんで、夫て呼んだんだ」

「ア、其女、彼奴を好いたんだ」とイルーサも口を入れた。左様さ其女が死ぬまで彼奴を擦ぐらうと思つたんだ。左様仕たかつたんだ。妖怪は皆な其様事をする」

「此處へも妖怪が来るだらうか」とフディアは言ひ出した。「なあに」とコスティアは答へる「此處は汚れのない廣野だ、何も無い、けれど河は近い」

皆な沈黙してしまつた。すると不意に遠方から長びいた符がする。何となく嘆くやうな、名状し難い夜の響の一つで、森乎としてゐる静寂を破つて空中に響さわたり、暫くたゆたつて次第次第に消えて行つた。もう何のことも無いやうではあるが猶何處か符してゐる。丁度何人か向の地平線上から長い長い叫聲を擧げると、他のものが又森の中から突徹るやうな嘖々笑聲で其に應答するかのやうで、幽かに洩れたシツと云ふ響が河の邊に消えて行くと、兒

童等は震へながら互に顔を見合せた。

「神様どうぞ」とイルサーサは嚇いた、「何だ弱蟲」とバフェルは叫んだ「何が
恐いんだ、オイ、もう馬鈴薯が煮えたぜ」

皆其鍋の所に集つて蒸氣のたつてる馬鈴薯を食ひ初めたが、ファンヤ一人
は動きさうにも仕ない。「オイも前も来ねえか」とバフェルは言つた。けれどフ
ワンヤは其粗布の下から出て来ない。其中にもう其鍋は全く空になつた。
「皆な、聞いたか？」とイルサーサは言出した「ファルナーフィツイでの夫の事
を」

「彼の水間近くのか？」とフェディアは尋ねた。

「ウム、其様さ、其水間近くの獵場さ、非常に寂しい所だ。彼處には一面穴
だの石坑だのあつて、其穴の中には始終蛇がある」

「何があつたんだ、話せ」

「まあ斯様事さ、フェディア、も前多分知るめえが、彼處には土左衛門が埋め
られてゐるめだぜ。昔の事で、彼の邊は未だ水の深かつた頃だ。そして今でも
其墓は判るが、外には何も無い、丁度これ位な小さな土饅頭。……そこで
或日の事役人が獵師のエルミルを呼んで言ふには、飛脚に行つて呉れエルミル
と、エルミルは能く何人の爲めにでも飛脚に行つた。此男は皆な其飼犬を死
なしてしまふ、如何いふ理由か犬は此男と一緒に居られない。決して能く
育つた例がない。好い獵師で誰でも悪くは言はなかつたが、そこで此エルミ
ルは其役人の飛脚に行つて暫く町に止て居てから馬で歸つて来た。少し微醉氣
で。夜だつた。好い晩で月は輝てゐる、……通り路なのだ其水間の所を横
ぎつて来た。通過しながら水死人の墓場の方を見ると、小さな羊のいかにも
白い、毛の縮れた、可愛らしいのが駆け回つてゐる。エルミルは一つ其奴を連
れて歸らうと思つたので、馬から降り其羊を腕に……へた。けれど羊はぢつ

として居る、そこでエルミルは馬の處へ返て來た。すると馬はエルミルを見つめて鼻息を鳴らし頭を振つた。エルミルは「オウ」と云つて馬を叱りながら、羊と一緒に馬に乗つて歩み出した。羊を前に置いて其を叱ると羊も亦斯様風にエルミルの顔を正面に見つめるので、エルミル獵師は仰天して、此奴のやうに羊の癖に人の顔を見つめるなんて聞いた事は無いと言つて、其毛の上を叩いて「クッキークッキークッキーク」と云ふと、羊も亦急に其齒を剣き出しながら「クッキークッキーク」といつた。

兒童等が其話の終の言葉を謂つたかいはないに、不意に二つの犬は一緒に飛び上つて、烈く吠えながら焚火の所から飛出して、間の中へ消えて仕まつた。小兒は皆驚いた。フリンヤは其粗布の下からはね起きた、バフルーザが犬の後を追掛ると、間もなく其吠える聲が遠の方へかすかになつた、すると物に恐れた馬の一群の心元なさうに地をふむ喧しい音が聞える、バフルー

サは聲高く叫だ。ヘイグレイ、ピートル(二匹の犬の名)と……暫くすると吠える聲が息で、バフルの聲ばかり猶遠くて響いてゐる……又少したつと小兒等は心配さうに何事か起りはしまいかと四邊を見廻してゐる、……すると馬の馳ける音が聞えて其が林の所で一寸止まつたと思ふと、鬘に捉まつてバフルはす疾く飛び降りた。二つの犬も焚火の圍周に飛込て坐りながら其紅い舌を吐出してゐる。

「何だ、何だ」と小兒等は訊た。

「何に」とバフルは馬の方へ手を振りながら「犬の奴め何か喚出したんだ、狼かも知れない」と言つて、靜かに深く息を吸込んだ。

私はどうしてもバフルを稱讚すには居られない。其時の様子は如何にも立派であつた。其醜い顔も急に馳けて來たので生き生きとなり、勇氣と決心とが充ち溢れてゐる。彼は鞭も何も持たずに、少しも臆せず夜々中狼に向

つて馳け出すのだ……立派な男だと思つて彼の方を見た。

「お前、狼を見たのか？」と震へながらスコティアは聞いた。

「此處にや始終澤山にゐるよ、だけど關はないや、冬でなけりや」と答へて、以前の通り火の傍へ坐り、横になつて其頭を一匹の龍犬の頭に載せた。暫の間其甘えた動物はパフェルの方を嬉しうに、又誇つたやうに見ながら、其頭を動かさなかつた。

ファンヤは復た其粗布の下へもぐり込だ。

「素的に怖い話を仕掛てゐたぢや無いか、イルーサ」とフェディアは言出した。裕福な農夫の兒だと云ふので、いつも話の音頭を取るのが此兒の役目のやうになつてゐた。其癖自分では餘り話を仕ない。自分の威嚴の下るのを痛く氣遣てゐるかの様に「今のは怪物が犬を吠えさせたんぢやあるまいか？……確か俺彼處へ怪物が出るつて聞いたよ」

「彼處へつて、ファルナークイシイへか？……俺もどうも左様思ふ、幾度も彼處で先の首長——死んだ首長を見たつて人がある。長い縁の付いた上衣を着て、斯な工合に呻りながら地へ向つて何か見付けるやうな風を仕てゐるつて。一度トロフィミッチ祖父さんが其れに出會つたとさ。何を地面から見付けようと思はるんです。イファン、イファンニッチさん、と祖父さんが聞いた」

「何に、祖父さんが聞いたつて？」とフェディアは喫驚して口を入れた。ウム祖父さんがきいたとさ」

「そりや剛毅なあトロフィミッチさんは、そこで何と言つたつて？」

「私は、何物でも突きぬいて行く草の芽を見付けるんだ、と謂つたとさ、鈍い太い聲で、しかし其草の芽なんか何にするんですイファンイファンニッチさんと、復た聞くと、墓が重くつて私は壓へ付けられるやうだ。トロフィミッチ、私は其を取除けたい……」

「聞きね、彼奴は生き足りなかつたと俺は思ふな」とフエディアは謂つた。

「不思議な事だ」とコステリアは云ふ。だが、聖靈祭の時だけは何人でも死んだ者に逢はれるつて、「何時でも逢はれるさ」とイルーサは如何にも深く信じたらしく口を入れた。私の見た所では此兒は他の者より、村落の迷信的事柄に就いて一層深く知つてゐるやうに思はれた。……「けれど、聖靈祭の時には其年の中に屹度死ぬはずの人でも見られるさ、教會の立關へ行つて、道の方を見て坐つてゐると、其年の中に死ぬ人が街道の方からやつて来る。去年はウルヤナ嬢さんが其立關へ行つたさうだ」

「フム、そして嬢さんは何人かを見たつてか？」とコステリアは如何にも先が聽きたさうに聞いた。「確かに見た、初の中は長い間坐つてゐた、けれど何も見も聞きもしない、只何處かて犬が悲しさうに吠えてるばかり、處が不意に向を見ると只シャツ一枚で一人の小兒が道をやつて来た、嬢さんは能く見

ると其がイフアスカ、フエトシーフよ」

「斯春死んだ？」とフエディアは口を入れた。

「さうさ、彼奴が道をやつて来た。けれど一寸つとも頭を擧げない、が、夫とは了解つた。所が復た向を見ると今度は一人の女かやつて来た。嬢さんは見詰めた。一心に其女を見詰めた……すると南無さん、其道をやつて来たのは嬢さん、ウルヤナ嬢さん自分だつたさうだ」

「そんな事があるもんか知ら？」とフエディアは問ふ。

「あるとも、確かに嬢さん自分だつた」

「けれど未だ死な無いぢやないか、彼の通りに」

「だつて未だ今年は濟まない、見てゐる、もう死にかゝつてゐらあ」

皆な復た沈黙してしまつた。

パフェルは小枝の一掴を火の中へ投じた。すると直ぐ燃立つ炎に焦がされ

てバシバシ音を立てたり又燻すぶたりして、其燃上る端の方は捲上つて短くなる。鮮かな火の光があたり一面に、殊に上方の方を照らし出した。すると不意に一羽の白鳩が火の光の中へ真直に舞込で、驚いて周囲をばたく羽ばたき仕ながら、真紅に照らされて、復た羽で風を截つて闇の裡へ見えなくなつた。「巢を忘れたんだらう」とパフェルは謂ひ出した。「何處か、朝迄ねる處の見付かる迄は、あゝやつて飛んであるくんのだ」

「何故、パフルーサ」とコステイは言ふ「あれは天に昇る、正直な人魂ぢや無いか知ら？」

パフェルは復、小枝の一掴を火の中へ投じて、

「左様かも知れん」と纒かに謂つた。

「だが、まあ話して呉れパフルーサ」とフェディアは言ひ出した。

「サラモフィーで、天の凶祥の時、お前達の見たつてものを」

「お日様の見られなかつた時か？ ウム」

「其時お前怖かつたか？」

「けれど、其は只俺等ばかりぢや無い。俺等の首長は前から天の凶祥だらうて言つてゐた。其れてゐながら、暗くなつて來たと思ふと、自分でも、當惑する位驚いたと云ふ風評だつた。すると雇人小屋の中では、一人の嫗さんが、暗くなつて來ると、火箸でもつて、有りたけの皿を竈の中へ投込で、もう何人が食べるもんか、世の末期が來た、と言つた。汗なんか其處ら一面に流れ出した。村の裡では斯な話が擴がつた。白い狼が地面を馳廻つて、無闇に人を食つたり、驚だの鷹だのが俺等を引摺で行つて、仕舞にはトリシカでさへ出て來るだらうて」

「トリシカで何んだ？」とコステイは問ふ。

「何故、知らんか」イルーサは熱心に説いて聞かせる「何故、お前何處で大

さくなつたッんだ。トリシカを知らないなんて？ お前家にはかりあるからだ。トリシカで奴は何かすると出て来る不思議な人さ。まあ斯様なやうな、何人にも捉まへる事の出来ない、どう爲る事も出来ない不思議な人。如何かして捉まへようッて杖なんか持て取まくと、直ぐ皆旨になつてはたたく倒れてしまふ。獄屋の中へ入れて置くと水を一杯呑み度いと云ふ、持つて行てやると、其水の中へは入てしまつて見えなくなる。鎖で縛ばつて置くと其手を一叩くともうばらりとほづれてしまふ。まあ斯な風にトリシカは村でも町でも歩き廻はす、始末にゆかない。クリスト宗の人達を迷はして、何人でも如何する事も出来ん、まあ左様不思議な仕ようの無い者さ」

「フム、そこで」バフェルは其考へ深い聲で言續けた「まあ左様なものさ、夫て皆なて其来るのを待てゐた。或老翁さんが、天の凶祥が初まると直ぐトリシカが来るだらうと言ひふらしたから。そこで天の凶祥か初まつた。皆

なが町や野原へ散らばつて如何な事になるだらうか見ようと思つて待つて居た。俺等の處は知つてゐるだらう、あの廣い村よ、皆な見てゐると、すると不意に山の横手を下て、大きな村の方から其様なやうな人がやつて来る、如何にも不思議な風姿、如何にも不思議な頭。皆な泣き出した。ヤ、トリシカが来た、トリシカが来たッて、そして皆めい／＼思ひ思ひの方へ逃出した。俺等の首長は溝渠の中へ爬込んだ、かみさんは戸口に蹠いて有たけの力で泣聲を擧げてわめき出す。すると飼犬の奴め驚きやつて鎖を振切り垣根を飛び越し森の中へ逃込んでしまつた。ク、ツカの爺と、ロフイツチの奴は麥畑へ飛込て突臥しながら鶉のやうにわめき出した。いくら、人を亡ぼす悪魔だつて鳥だけは助けて呉れ」と、まあ斯な工合に皆なあわて、騒ぎ廻した。所が其向からやつて来た男と謂つたら、何の事はない俺等の村の桶屋のフファイラよ、新しい甕を持つて来て、其虚なやつを頭から冠ぶつてゐやがつた」

皆々の小兒が笑ひ出した、復た暫くの間は、沈黙てしまふ。人が廣い野原で話合つてゐる時には能くあるやうな風に。

私は、嚴肅な、威嚴のある夜の静かなさまを眺めやつた。夕方の露深く爽かてあつた氣候は、夜中になるにつれて、次第に乾いた暑さとなつた、闇は熟睡してゐる野原の上に、柔かな幕を垂れて容易に去りさうもない。曙の初め、露の滴たる音の聞える迄には未だ中々間があるであらう。上るに晚い頃なので、空には未だ月もない、無数の黄金の星は燦然と光を争うて、皆音なく銀河の方へ走るやうに見える、此を見てゐると殆ど息みなき地球の回轉のさまが知れるやうだ。

……すると不思議な、烈い、苦痛の叫聲が河の方で二度まで響いた。暫くすると遠く河下の方でまた繰返してゐる。

コステイアは戦慄して「何んだらう?」「蒼鷺の聲さ」とバフェルは沈着い

て答へる。

「蒼鷺」とコステイアは口まねして「昨夜俺の聞いたのは何んだつたらう」と一寸間を置いて言ひ添へた「多分ち前知つてゐたらう?」

「何を聞いたのだ?」

「まあ斯様さ、俺はストーンからシアシキノへ行く途中よ、初め胡桃の森を通つて小さな池の端へ出た……洞穴の方へ急になつてゐる所を知つてゐたらう——彼處の水溜ね、蘆が一ぱい生てゐる。そこで俺は其水溜の傍へ行つた。すると如何だ、不意に其中から呻聲が起つた、そりや悲しさに、ウオーウオー、ウオーウオー、つて、其時の怖さつたら、もう曉方だらう、それに其聲つたら、俺は思はず聲を立てた……何だつたらう、エ、?」

「彼の池さ、去年の夏、泥棒が森番のアキムを殺したのは、」とバフェルは謂つた「それで、多分其幽霊が泣いたんだらう」

「ほんとにか、皆な」とコステイアは答へた、丸い眼を一層廣く見開いて「泥棒があつた池でアキムを殺したなんて俺少しも知らなんだ、知つてりやそんなに驚かなかつたに」

「だが彼處にや、小ちやい蛙がある。其奴が其様な風に悲しうに鳴くつて咄だ」とバフェルは續けた。

「蛙？、何して蛙なもんか、屹度左様ぢやない、蒼鷺が亦一聲河の上で鳴いた、ア、あれよ」とコステイアは思はず叫んだ「丁度精靈の叫聲のやうぢやないか」

「精靈は泣きやしない、瘧だ」とイルーサは口を入れる。

「只斗を叩いて嗷々云ふだけよ」では、お前精靈を見たのか？」とフェデアは嘲笑ひ半分に聞いた。

「如何して、見るもんか、見ないやうにして下さらあ神様が。けれど見たつ

て人が有る、或日の事で精靈が俺の村の一人の百姓を迷はして、森の中だの原の中だの引廻したのさ。其奴は日の出る時分キツと歸つて来た」

「そして其奴は精靈を見たつてのか」

「左様よ、そりや大きな丁度木のやうに、眞黒く、括まつた者だつて、月の光から隠れるやうにして、其大きな目で凝視つけて、眼たさしながら……」

「フウン、」フェデアは少し慄へながら言つた、肩をすぼめて、

「如何して左様な汚ららしい怪物が住んでるだらう？不思議だな、」とバフェルはいつた。「悪い事を云ふな、氣を付けないと、聞えるぞ」とイルーサは言ふ。

又暫く寂然する。

「ライ、見る見る皆な」と不意にファンヤは幼い聲を立てた。「見ろ、神様の小ちやな見が蜂のやうに集まつてらあ」と其元氣の好い、小さな顔を粗布の下から出して、小さな拳をついて、そして静かに其大きな可愛い眼で見上げ

た。皆な眼を空の方へ向けて、暫くづつと見てる。

「フアンヤ」と如何にもいとしさうにフェディアは言ひ出した。「お前の妹のアンイェトカは何にしてゐる？」

「ウム、元氣がいよ」とフアンヤは其薄い唇で答へた。

「何故此處へ來ないのだらう？」「わからないな」來いで言ひぬ「ウム」俺がやる物が有るッて「俺にもか？」「あゝお前にも」フアンヤは長い息をついた。「いや俺いらねえ、妹にやつて呉れ、妹は家にゐると皆なに親切だよ」フアンヤに復た其頭を下げた。バフェルは立上つて虚の鍋を執り上げる。「何處へ行くんだ」とフェディアは問ふ。「河へ水を汲みに、俺水を欲いんだ」犬も立上つて後から隨て行つて。

「氣を付ける、河へ落ちこちるな」イルーサは後から呼んだ。「落ちや仕まい氣を付けるんだらう」とフェディアは云ふ。

「フム氣を付けるさ、けれど、ひよつとすると水を吸まうッて前へのめりすぎると、何童の奴が捉へて引ずり込む、左様すると、人は彼の兒は水へころび落ちたんだと言ふんだ……ころび落ちる……ア、蘆の中へは入つて行つたやうだ」と凝と耳を立て、聞いてゐる、

蘆の葉のさらりと鳴るのが聞える。

「だが彼の事は眞實か？」とコスティアは問ひ出した「氣違のアタリリナよ、彼の女水へ落ちてから氣違になつたッて」

「ウム、夫れからだ……今ぢやあんな怖ろしい風だが、其前迄は、中々美しかつたッて話だ。河童が彼の女を迷はしたんださうだ。河童の奴は、皆なが彼の女をさう早く引上げようとは思はなかつたらう。夫て河の底で彼の女を迷はしてゐたんだ」

(私は此アタリリナに一度ならず出逢つた、恐ろしい薄い粗布を被ぶつて石

炭のやうな黒い顔で、爛眼で絶えず歯をむき出しながら途の一つ所に幾時間も立留つて、ひょろ／＼したり、骨ばかりの手を胸へ押へ付けたり、丁度野の鳥の籠の中へ入れられたやうに、静かに片足づゝ置換へたり、又何を言はれても少しも解らない、只絶えず痙攣を起すやうに略々と謂つてゐる。

「けれど」とコステイアは復た話し續ける「情夫があゝの女を瞞したんで、夫でアターナは河へ飛込むんださうだ」

「さうだ、さうだ、處でお前は彼のフアスヤを知つてゐるか」とコステイアは氣毒さうに言ひ添へた。

「何に、フアスヤ？」フエディアが聞き直すと、「ウム、水へおつちて死んだ彼の兒さ」とコステイアは答へる。「彼の河で、ア、好い兒だつたに、彼の母のフエクリスタは何様に可愛がったか知れやしない。だから蟲が知らせたかフエクリスタは彼の兒に水難が来るだらうと謂つてゐた。フアスヤが俺等

と一緒に河へ水泳に行つた時は、いつでも彼の母は慄へ上つた。他の女は何とも思はないで、手桶を提げたなり通つて行くけれど、フエクリスタ一人だけ手桶を地面に置いて、彼の兒を呼んで「お出で、坊！歸つても出で、いゝ坊だから」と言つてた、そして誰だつて、彼の兒が如何して洗んだか知つてゐる者が無い。フアスヤが堤の上で遊んでゐて、母は秣を刈つて乾してゐた。すると不意に、誰か河の中で水煙を擧げたやうな音がした、と思ふと如何だ。フアスヤの小さな帽子が水の上を浮いたり沈んだり仕てゐるさう何も見えな。其時からあの通りフエクリスタの氣が狂ひ出したんだ。夫の兒が洗んだ場所へ行つちや横になつて、それから歌を唄ひ出す——フアスヤが始終彼様な歌を唄つてゐたのは知つてゐたらう——其を唄つては泣いて泣いて、神も佛も怨らめしいッて」

「バフルーサが歸つて來た」とフエディアは言つた。バフェルは一ぱい水を

汲んだ鍋を手に持つて火の處までやつて來た。

「オイ、皆な」と少し間があつてから口を切つた。「變な事があつた」、「エ、何に？」コステイアは急いで聞くと、

「俺らフアンヤの聲を聞いた」皆な慄へ上る、「何んだ、何うだ、」とコステイアは吃りながら聞く。

「よくは了解らむ、俺は只水を汲まうつて降りて行つた。すると不意にフアスヤの聲で俺の名を呼んだ。水の中からのやうだ。」バフルーサ、バフルーサ、此處へ歩いてつて「俺は逃出した。けれども水だけは汲んで來た。

「ア、神様のも恵だ」と皆なめい／＼十字を切つた。

「河童がち前を呼んだんだ、バフェル」とフェディアは云ふ。俺等は今フアスヤの話を仕てゐた」

「ア、悪い徴候だ」とイルーサは深く考込でいふ。何に、そんな事を氣に爲

るな」とバフェルはきつぱり口を切つて、舊のやうに坐り込んで「何人だつて運なら仕方がない」

兒童等は皆な沈黙してしまつた。バフェルの言葉が深く皆の胸に沁込んだに違ひない。皆な睡らうとして火の前に横になつた。

「あれは何だらう？」カステイアは不意に顔を擧げた。バフェルはちつと聞いて居る。

「鳴が飛んでゐるんだ、其鳴聲だ」如何へ飛ぶんだらう？」「冬の無い國へだつて」全様な處が有るか？」「あるさ」「遠い處？」「遠い遠い暖い海の向ふよ」「コステイアは溜息して眼を閉ぢた。

私が小兒等の處へ來てからもう三時間餘も経つた、月もとう／＼登つたが、極く細い三日月で、初めは氣が付かなかつたくらゐだ。此月のない夜のさまは、初めのやうにしんとして寂びしい……けれど中空に高かつた、數多の星影

はやがて次第次第に、地上の闇い縁の方に沈みかゝつて、四周の者は皆明方近く寂然として、深い静かな夢路を辿つてゐる。大氣の中には薫りが薄くなつて、露が復た置き初める。夏の夜の短いこと！……小兒等の話聲が無くなつた頃には火も亦大方消えてゐて、犬までも眠さうて、幽かな星の光の下に、やう／＼、眼に入るやうな遠くの處では馬も皆頭を下げて睡つてゐる……自分もうと／＼として微睡だ。

爽やかな微風が顔にさはつたので眼を開いて見ると、もう夜が明けかゝつてゐる、空は未だ晴れ切らないが東の方がほの／＼と白くなつて、四邊は茫としてゐるけれど、萬物が次第に目に入つて来る。薄暗い灰色の空は明るい冷かな蒼色を帯びて来て、星の光は幽かに輝きながら消えて行き、地上は濕ほつて草や木の葉の上には一ばいに露が置いてゐる。遠くの方からは物音や人聲が聞えて、心持の好い朝の微風が地面の上をゆる／＼戦いて行く。私の

身體は喜悅さて、ぞく／＼した。急で立上つて小兒等の方へ行くと、燦つてゐる火の周圍に疲れきつたやうな風で皆な眠つてゐる。只一人バフェルだけ半身を起して私の方を凝と見詰めた。

私は彼に一寸會釋して、露深い河の堤を家路へ向つた。未だ二哩は來ないだらうと思つて、四邊を見廻はすと、私の立つあたりより一帯、露あき渡したる廣い平原、前の方には森から森、小山は緑の色を染めて、後の方には塵の立つ長い一條の途、朝日、紅、香こぼる、此處彼處の藪影、晴れ行く狭霧の下に幽かに青く輝く河の面が、燃え立つやうな鮮な光を流して、初のほどは石竹色に次第に紅となり、又金色となる。萬の物は働き、眼ざめ、歌ひ、鼓動し、語り出し、あたり一面露はしとどに滴たつて、金剛石を連らねたやう、清い澄んだ朝の爽かさを浴びて、私の身を喜び迎へるかのやうに朝の鐘が聞えて來ると思つてゐると、不意に今別れて來たばかりの小兒等が、元

氣よくなつた馬の一群を驅り立て私の傍を過ぎて行つた。
 言ふも可愛さうだが、其年バフェルは死んで仕まつた。けれど水に溺れた
 のてはなく、馬から落ちて死んだのだ。氣の毒な！立派な兒だつたのに。

死

私には一人の年若い地主で、遊獵家の隣人がある。七月のある美しい朝の
 事で、私は一緒に松鷄獵に出かけようとて其人の所へ馬で出かけて行くと、
 早速同意して、「まあツウシアの救へても行つて見よう」と云ふ。「幸ひチア
 プリジノの森をも見廻る事が出来るしね、そらあの檜樹林さ、彼處では大勢
 で材木を伐つてゐるんだ」、「まあ兎に角と」と彼は馬へ鞍を付ける事を命じ
 て、猪の頭を彫り付けた、青銅の扣鈕の付いた緑色の上衣を着て、美しい麻
 糸で刺繡した獲物袋と、銀の火薬箱とを付け、新式の佛蘭西銃をば肩にして、
 得意氣に姿見の前に立つて身邊を見廻した。そして、従弟の贈つて呉れた、
 ホープと云ふ雌犬を呼んだ。いかにも伶俐い犬ではあるが、もう年とつて頭
 には毛がない。

二人は出掛けた。此人は又アルヒップと云ふ村役人をば一緒に連れだした。岩壘な、矮小の肥満の男で、其四角い顔と顎とはいかにも舊式だ。此男は近頃一人の見張番をバルティック州から雇ひ入れた。十九才の若者で、薄い亞麻色の頭髪をした、近眼で、撫て肩で、頸が長い、ゴックのゴッドリーブと呼ばれてゐる。

私の隣人もつい近頃財産を受取つた計りなので、其財産は叔母の遺産として彼に傳へられたのだ。此叔母と云ふのは、カルドンカテーフ夫人と云つてある参議官の寡婦で、見掛けはいかにも岩壘な女性であつたが、始終臥床で呻吟つてゐるより外には何も爲なかつた。

私達一行は目指す藪へ到着した。お前達は此處の開懸地で私を待つてゐてくれ」とアルダリオン、ミハリッチ（私の隣人の名前）は自分の同行者と云つた。すると、ゼルマン人（ゴットリーブ）は意を了して、馬をば向ふへ引

いて行つて、自分の衣兜から一冊の書籍を取出した、ヨハンナ、シロウペンハッラーのものらしかつた。——藪陰へ坐を占めた。アルヒップは約一時間も髻一本も動かさず日中に留つてゐた。

私達は藪の中をば無暗に歩き廻つたが、一群の鳥にすら出逢はなかつた。

アルダリオン、ミハリッチは、チアブリヂノの森へ行かうと云ひ出した。私は、其日は到底望みが無いものと思れたが、それでも、後方から従いて行く事にした。先きの開懸地の所まで引歸して來ると、書物を見てゐた日耳曼人は立ち上つて、其書物を衣兜へ納め、一寸と手艱つたが、尾を短かく截つた、喘氣の牝馬に飛び乗つた。此馬は能く一寸した事にも嘶いたり蹴つたりする癖がある。アルヒップは身を揺つて、同時に兩手綱を曳き、足を動かして、纒かに、其鈍い氣落した馬をば勵ました。一行は出發した。

私はアルダリアン、ミハリッチの森には幼時から行き慣れてゐた。幾度と

なく、佛蘭西人の家庭教師、デジレ、フルトリー氏と一所に此チアブリジノの森へ入り込んだものだ。此佛蘭西人は、極めて親切な人だつたが、毎晩のやうに私にレロックスの學説を其まゝ丸飲にさせたので、生涯、私の健康をば打碎して了つた。

林全體が二三千本の巨大な樅や秦皮樹から出来てゐて、其巨大な力強さ樹幹は色が如何にも眞黒で、榛の藪や、山秦皮樹の透通るやうな金色が、つた緑葉と相對してゐる。尙高く、廣がつて、互に紛れ合つてゐる枝と枝とは、優雅な線を描いて、鮮かな青空に向つて、頭上に天幕を張つてゐる。鷹のすのうだの、まぐろ鷹だのは、動搖がない樹の枝の下をひゆう／＼羽音させながら飛んでゐる。羽色の彩な啄木鳥は、固い樹皮をば音高く叩いて、鶉の鈴のやうな鳴聲が不意に濃く茂つた葉の中から聞こえ来ると思ふと、變化極り無き山頬白の叫び聲が響いて来る。下の藪の中では野鷲鳩や鶯や、鳧や

が囀つてる、獺は小徑を疾走して過ぎ、野兎はこそ／＼と周圍に氣を止めながら、森の端をば走つて行く。木鼠は樹から樹と戯れながら躍り廻り、不意に止つては、頭の上に尾をあげて静止してゐる。

小高い丘の下草の中、いかにも愛らしい、羽毛のやうな、刻み目の深い羊齒の葉の柔しい葉陰に覆はれて、菫や、百合や、芝草が、黄褐色と黄色に、蔦色に、赤に、眞紅に、様々な色をして茂つてゐる。一面に敷きつめた草叢の中には、紅な毒の實が見出される。

而して森の木陰には、眞晝の窒息するやうな暑さの時も、いかにも平和な、いかにも香ばしい爽かさがあつた。——私はチアブリジノの森で幾度となく楽しい時を送つた事であらう、又實際幾度となく陰鬱な思をして此森へ入り込んだ事であらう。

千八百四十年の破壊的な雪の降なかつた冬は、私の故舊の樅の樹、秦皮樹

などを傷めて、其等の樹は只枝上に此處彼處病葉が着いてゐるばかり、大方の葉は凋落しては、幹もあらはに、此等に取つて代らんとする若木をば上から覆うて痛ましげにもがさがいてゐるが、遂に舊態に復す事は出来な、(著者の註。千八百四十年には降霜烈しく、雪は十二月の末に到るまでも降らず、有ゆる冬季の穀物は傷められ、多くの立派な檜の森は破られて、土地の耕作力も減じ此を恢復する事は出来なかつた(後略)中にはまだ下の方だけに葉が着いてゐるが、生氣も失せて、傷つてゐる其枝をば、絶望的に突き出して、人を非難するやうに上の方へ伸ばしてゐるものもある。又太い枯れた枝をば葉の茂みから突き出してゐるものもある。此等の葉は昔時の華かさは少ないが、それでも猶厚く茂つてゐる。又全く倒れ果てた屍骸のやうに地上に朽ちて横つてゐるものもある。あゝ、何人か曩の日に於ける此森の様をば想ひ起す事が出来よう。一つの木陰、只一つの木陰すら、チャブリデノの森

の何處へ行くとも、見出されないではないか。「あゝ」と私は思つた、枯れ行く樹々を見上げながら、「いかにも恥づべき傷はしいさまではないか」……コルトソフの、句をば思ひ起した。

いかに成りしぞ
かゝの雄々しき聲々は
かの誇らしの強き力は
かの殿めしき裝飾は
何處へ行きし
かの野かなる緑葉は

「一體如何したんだ、アルダリオン、ミハリツチ、」と私は言ひ出した。「何故、あの翌年に此等の木を切らなんだ、今では彼の時の十分一も役に立たないぢやないか」
彼は只肩を一寸揺つた。

「それは、私の叔母に訊くが好い。材木商が来て、金を拂つて、其事と定めたまてさ」

「オ、オ、」とコックの男は一步毎に聲を擧げる。

「惜しいなく」

「何が惜しいんだ」と、私の隣人は微笑ながら言つた。

「だつて、惜しいんぢやありませんか」

殊に此男を口惜く思はせたのは、地上に倒れてゐた樫の樹であつた。

なる程、多くの磨機屋に見せたら、此等の木には高い値踏をしたらうと思はれる。だが村役人のアルヒップだけは其様な事は氣にも留めないと云ふ風で、樹の上をば飛び越えて、得意氣に鞭を鳴らしてゐる。

大勢が木を切り倒してゐる場處へ近寄つて行くと、木のカタツと云つて倒れる音に次いで、不意の叫び聲と何か忙はしさうにわめいてゐるのが聞こえ

る。五六分立つたかと思ふと、若い農夫が顔色も眞青で頭髪を亂して、森の奥の方から、私達の方へ飛出して來た。

「如何したんだ、何處へ行くんだお前」とアルダリオン、ミハリッチは其男に訊ねた。

直ぐに其男は止まつて、

「ア、アルダリオン、ミハリッチ旦那、大變でさあ」

「何が」

「マキシムが、旦那、木で潰されたんでさあ」

「如何して其様な事が……マキシムが、あの小頭の」

「え、小頭です、旦那、私等達秦皮の樹を切てゐると、頭は傍て見てゐやした……一寸其處に立つてゐると、井戸の方へ水飲みに行つたんでさあ、まあ飲みたかつたもんと見える——すると不意に秦皮樹がギイといひ出して、

頭の方へ真直に倒れかゝる、私等皆まで、早く逃げた、逃げたと言ふと……頭は何處か傍へ逃げれば好いに、真直ぐ、前面へ走け出したもんだ——まあ魂消げて了つたのでさあね、秦皮樹の真先の枝が上から押かぶされる。だが如何して彼様に早く倒れたか、さつぱり解らね……まあ心臓が朽さつてゐたんずらう」

「で、マキシムは潰ぶされたか？」

「え、旦那」

「死んだか」

「い、え、旦那、まだ生きては居やす、がね、——死だも全様で、手も足もめちやく、私はセリイヴェルステイッチへ醫者様のお迎えに行くんで」

アルダリオン、ミハリツチは村役人にセリイヴェルステイッチの村の方へ駆けて行くやうに命じて、自分は空地の方へ急いで進んで行つた。……私も後

方から従いて行つた。

見るとマキシムは地面に横になつてゐる。農夫等は其周囲を取巻いてゐる。私等二人は馬から下りた。マクジムはまるで唸る事すら出来ない。折々何かに愕いたやうにばつと眼を開いて周囲を見廻はし、暫次色を無して行く其唇を噛みしめてゐる。……顔の下半部は痙攣を起し、頭髮は亂れて眉にかゝり胸は不規則に鼓動してゐる。もう死にかゝつてゐるのだ。若い菩提樹の輕やかな葉影は其顔の上をばこつそりなでゝゐる。

私達が其男の上へ身を曲がめると、アルダリオン、ミハリツチをば見て取つて。

「あ、旦那」とミハリツチに向つて言ふ、が殆んど判明らない。「牧師様の……迎ひに……そして、……神様の罪だつて、……手も足も打潰れて……今日……日曜だに……あ、……皆に行つて……仕事しろつて」

呼吸が切れてやんで了つた。

「が。私の金は……女房に……割引してから、……オネジムは知つてる、……何人に借りてるか」

「今お醫者の迎ひにやつたんだ、マキシム」と隣人は言ふ。「大丈夫だよ、死にやしない」

マキシムは目を開けようとして、漸の事で、眼瞼をあげた。

「イヤ、死にます、あゝ駄目、駄目、……堪忍して呉れ若衆達、何かあるかも知れぬえが……」

「神様が免しなさる。マキシム、アンドイレチさん、」と農夫等は皆な一緒に重々しく言つて、冠りを取る。勘辨して呉んな」

マキシムは突然、断念したやうに頭を振つた。胸はいかにも苦しげに波打つてゐる。またぐたりとして了つた。

「それはさうと、此様やつて此處で死なせるわけには行かない、」とアルダリオン、ミハリツチは叫ぶ。「オイ皆な、車から座を持つて来い、そして病院へ連れて行け」

二人ばかり、車の方へ駆けて行つた。

「昨日……馬を買つて、」と死にかゝつた其男は、されくくに言ひだす。「手附を……エフイム、シチヨフスキーに渡したて、……まあ此方のものだ、……彼奴を……女房にやつて……」

皆して、其れを座の上へ戴せようと身體を動かすと、……負傷した鳥のやうに、身軀ぢうが震へあがる、と、もう堅く伸びてしまつた。……

「あゝ、死じまつた」と農夫等は嚇いた。

私達は黙つて馬に乗つて、其處を出て了つた。

マクジムの感然な死に様が深く私を考へさせる。魯西亞の農夫は實際不思

議な死様をする。彼の最後の有様は、無頓着とも魯鈍とも呼ぶべきではない。何か落着いて、心から嚴肅な儀式でも行つてゐるやうな調子で死んで行のた。

五六年前、田舎の方の私の最一人の隣人の小作人が、穀物を入れて置いた物乾小屋で、甚く焼かれた事がある。(幸ひ一人の旅商人が、半死半生になつてゐるのを引出して呉れたので好かつたものゝ、てなければ、いつ迄も其中にゐたかも知れない。旅商は、水桶の中へ飛び込んで、燃えてゐる小屋の戸を挽磨で打壊はしたのだ)。私は其男を見た小屋の中へ行くと、中は暗く煙つて呼吸も塞りさうだ。私は訊いた。

「負傷者は何處にゐる」

「此處に、旦那、ストーブの上にと」と、百姓の女が、愁嘆ながら、抑揚の無い聲で答へる。行つて見ると、其農夫は上から羊皮を被られて苦しげに呼吸を

ついてゐる。

「フウ、何様な気分だぞ」

負傷者はストーブの上で身動きした。全身焼かれて、死ぬばかりだ。起きやうとするので、

「其儘、静かに、静かに寝てゐな、……フム、如何様」

「駄目でさあ、到底も」と言ふ。

「苦しいか。」答へが無い。

「何か欲しいものは、全じく答へが無い。

「茶か何かやらうか。」何も欲りましね」

私は少し離れて椅子へ腰掛けた。十五分間も坐つてゐた。半時間程も、――小屋の中は寂然として墓場のやうだ。片隅のテーブルの陰の方に、聖畫の掛つてゐる下に十二位の女の兒が蹲つてパンの片を嚙つてゐる。母親は折々

其兒を叱つてゐる。外側の室には人が行つたり來たりして、何かの騒ぎや話し聲が聞こえて來る。農夫の兄の妻は甘菜を刻んでゐる。

「あゝ、アクシニア、」と負傷者が言ひ出した。

「何に」
二田村四郎次

「フゲアス（ライ麥の酒）を」

アクシニアは幾許かのクヴァスを興ると、復た舊の沈黙となる。私は小聲で、「聖禮をしてやつたか」と訊くと、「ハイ」と答へる、もう何もかも皆な整つた。其男は只死ぬのを待つばかりだ。私はもう耐らなくなつて、出てしまつた。……

又私は或日クラスノゴクエの村の病院へ、外科醫のカピトンを訪ねて行つた事を思ひ出す、此男は私の友人で熱心な遊獵家だ。

此病院は地主の家の物置になつてゐた建物から出來たので、地主の家の主婦が建てたのだ。と云ふのは、其主婦が、其建物の戸口へ白字で「クラスノゴリエ病院」と記した看板を釘たせたので、カピトンには自分から病人の名の記入すべき赤色の名簿を手渡した。此名簿の第一ページには此主婦ボイテイフルの追従者の一人が次のやうな文句を記入した。

樂しみの領する此美しき揚處に

美しき人の手によりて此館は建てられぬ

此地の主の恵みを稱へよ

クラスゴリエの人々よ

すると他の男は次ぎのやうに記入した。

「我も亦自然を愛づ」

(ツエーメン、ユビイリアトニコフ)

外科醫は自腹を切つて六個の寢臺を買ひ整へ、神の僕婢達を治療してやる

と云ふので、感謝して其仕事に従つた。此醫者の外に役員が二人、一人は彫刻師のバツエルと云ふので折々癡狂にかゝる男だ。最一人は片腕しかない、百姓女メリキトエサと云つて、料理番をしてゐる。二人共藥の調合や、本草を乾したり、振り出したり、患者が取りのぼせてもする時は二人で鎮めてやつたりしてゐる。此癡狂の彫刻師は、陰氣な様子で、むつちりしてゐる。夜になると、さつと「可愛いヴェナス」の歌をうたふ、そして、何人でも出逢ふものには、マレーニアと云つて、もうづつと以前に死んだ娘と結婚させて呉れると言つては噛り付く。片腕女はいつも此男を叩いて、七面鳥の番に追ひやつて了ふ。

さて、或日の事、私はカピトスの家へ行つて、先頃の獵の話などしてゐると、不意に一臺の荷馬車が庭の中へ乗り込んで來た。其車は水車屋でも無ければ持つてゐないやうな、稀に見る岩疊な馬が牽いてゐる。車の中には身

長のじくじくした農夫が、新しい外套を着けて、灰色混りの鬚をして乗つてゐる。

「ヤア、ヴァシリ、ドミトリツチさん」とカピトンは窓から聲を掛けて「ああ、おは入り……リオポフシンの水車屋だ」と、私に小聲で囁いた。其農夫は少し唸るやうにして車から出て、醫者の室へは入つて來た。掛つてゐる聖畫を見ると、其前へ身を曲めながら十字を切つた。

「さあ、バシリ、ドミトリツチ。何か變つた事でもあるかな……うむ、何處か悪るさうだな、氣分が勝れないやうだな」

「へえ、カピトン、ティモフエチさん、如何様も工合が悪うござして」

「一體如何様したんだ」

「へえ、まあ、斯様なんでさあ、カピトン、ティモフエチさん。つい此頃、町で磨臼を買つたんで、家へ運んで來て、車から取り出さうとすると、筋が

違つたのか、如何様したのか、腰の邊から何か抜き取りでも爲たやうに、尙
 働つて了つて、それから如何様も合工が悪い、今日は特に悪くて」

「フム」と、カピトンは仔細ありげに言つて、喫煙草を一掴み取り出した。

「多分、歇兒尼亞だな、だが、何日からだな」

「もう、十日許」

「十日？」（醫者は深く溜息をついて、頭を振つた。）「まあ、見せなさい」

「フム、成程、ヴァシリ、ドミトリッチさん」と醫者はやうやく口を切つて、

「氣の毒な事だ、眞個に氣の氣だ。どうも萬事好くない。お前さん餘程悪い
 んだぜ、まあ此家に留まつて居なさい、引受けは出来ないが、私が出来るだ
 けは仕て上げるから」

「其様に悪いですか」と、農夫は驚いて、ぶつ／＼言つてゐる。

「ウム、ヴァシリ、ドミトリッチさん、悪いぞ、もう一日か二日早く來さへ

すりや、大した事はなかつたに、直ぐにも癒して上げたんだが。今では脈衝

が初まりかゝつてゐるからな、ぐづくしてゐる中に、脱疽にてもなると」

「でも、來られ無えてすもの、カピトン、ティモフェッチさん」

「まあ、私の言ふ通りさ」

「ぢや、如何様になります」

（醫者は肩を上下したばかり）

「此様なつまらぬ事を死ななさいならねえかな……」

「其様な事を言やしない……まあ、好いから此家に留まつて居なさい」

農夫は黙つて床の上を見詰めたまゝ考へ込んで了つた。私等二人の方を見
 上げたと思ふと、不意に頭を掻きむしつて、帽子を掴み上げた。

「何處へ行くんだ、お前、ヴァシリ、ドミトリッチ」

「何處で、家へ、其様なに悪いなら。色々極をつけなければ、其様ななら」

「だつて、一層悪くするぞ、ヴァシリ、ドミトリッチ、眞個にお前さん。此處までやつて来たのでさへ驚くんだもの。どうしても、動いちゃいけない」

「いや、お前様、カピトン、ティモフイチさん、どうせ死ぬなら、家で死ぬ。此處で死ぬ理由はない。私だつて家がある、如何様なるか神委かせ」

「如何様なるかなんて、ヴァシリ、ドミトリッチ、何人にだつてまだ解るものか……危ない危ない、非常に危険いのは言ふまでも無いが……だから一層此家に留まつて居なさいやならんと言ふのだ」

(農夫は頭を振つて)

「いや、カピトン、ティモフイチさん、私は居たく無い、……が、處方書さでも下さるか」

「藥だけぢや駄目だ」

「でも、居たか無えて」

「よし、ぢやお前の好いやうに、……だが、後になつて私を恨んぢや困るよ」

醫者は帳簿を切り取つて處方を書いて、其他に出来るだけの注意を與へてやつた。農夫は其紙片を取り上げて、カピトンに半ルーブルを手渡して、室を出て、車の中へ腰を卸した。

左様なら、カピトン、ティモフイチさん、悪かつた事は勘辨して、餓鬼共の事でも見てやつてお呉なさい、若しなんなら……」

「ア、待つた、ヴァシリ」

農夫は一寸頭を振つて、手綱で馬を叩いて、庭から驅り立て、行つた。道路は泥深く、凸凹してゐる。水車屋は注意して、急かす、巧みに馬を追つて、途中で出逢つたものには皆な挨拶しながら歸つて行つた。

三日たつと、此男は死んで了つた。

露西亞人は一般に不思議な死様をする。今私は多くの死んだ人の記憶が私の胸に浮んで来る。我が老友、大學をば中途で去つたアヴェニル、ソロスウモフ君、高潔純良な君。あゝ君の病ひ勝ちな肺病だちの顔、君の細い蒼色の巻髪、柔しい笑まひ、引入れられるやうな眼眸、長い手足などが眼に浮ぶ。君の弱々しい懐しい聲が聞こえる。

君はグル、クルビアニニフと呼ぶ中央露西亞の大地主の家に居て、二人の小兒、ソーフ、とゼイオーツヤとに、露西亞文典だの地理歴史だのを教へ、グルの悪洒落も、番當の無作法も、悪戯小兒の悪ふざけも黙つて忍ばなければならなかつた。苦笑しながらも、不平も言はず、煩さい刻薄な主婦の氣まぐれにも従順に従つてゐた。が此等の補ひは、夕暮、食後に總ての義務を脱れて、窓に倚つて愁然として煙草を燻らす時か、或は君と全様な家なき憐れな男の畑番が町から持つて来た雑誌類の脂じみた毀かゝつたのに専念見入つ

てゐる時の樂しさ、平和かさがせめての慰めてあつたのだ。君が其頃は、如何にも樂しく笑ふ。他人を愛する純潔の情、高尚なる事物に對する寛き同情は君が若々しい純粹な精神に充ちてゐたのだ。

眞實を言はなければ解らないが。君は目立つて才智の勝つた方では無い。記憶力も精勵の元氣も餘り持てゐなかつた。大學では寧ろ望み少ない者だと思はれてゐた。講義最中に居睡り、試験には沈黙とさめ込んで了ふ。が、君位、友人の成功や勝利に激して、夢中になつて悦ぶ人もなかつた。アヴェニル君！……君ぐらゐ友人の秀てた運命を盲目的に信じて、誇つて其友人を稱讚する人もなかつた。友人を保護する爲めには猛烈に戦ひ、虚榮も嫉も知らず、常時も身を犠牲にして顧みない、靴紐一つ結んでやる價もないやうな人に迄ても心から謙遜する。君のやうな人も見た事はない。……それが君

だ、君の總てだ、我々の善良なアヴェニール君！……君が田舎の家庭教師になる事になつて、我々の仲間から別れて行つた時の心痛の様が思ひ出される。不幸の前兆が君の胸には往來してゐたものと見える……實際田舎に於ける君の運命は悲しきものであつた。一人の尊敬を拂つて傾聴すべき説をなすものもなく、稱讚すべきも、愛すべきもの、一人も無かつた。……隣人と云へば、野育ちの荒くれ兒童か、多少は物の解つた連中ても、等しく君を家庭教師と見なして、亂暴をするか、等閑にするか、氣も留めない連中もある。加之君の様子が人好きのする方では無い、内氣で、顔を赤める方で、熱すると口が吃る。……君が健康は又田舎の空氣に適しない、蠟燭のやうに次第に消耗されて行つたんだ、氣の毒な人だ！

君の室は果樹園の方に向つて居たのだつけ、野櫻や、林檎や菩提樹が其柔しい花を君の机の上、インキ壺の上、書籍の上に撒き散らす。壁には情も

ろい、亞麻色の頭髮をした、小さな青い眼の獨逸人の女教師が別れ際に送つた青絹の時計入れが掛つてゐる。折々はモスカウから舊友がやつて来ては新しい詩で、中には友人の自作のものもあるが、君を夢中にさせて了ふ事があつた。けれど、噫、寂しさ、家庭教師の忍び難い束縛の生涯！逃げるにも逃げられず、果しなき秋と冬と、断えず犯しくる病魔と、……氣の毒な、氣の毒なアヴェニール君！……

私は此人の死ぬ少し前一回訪問した。其頃は殆んど話も出來ず。家主のグロ、クツビアニコフは家からこそ追ひ出しはしないが、もう報酬を拂ふのは止めて、ゾウツヤの爲めに他の教師を雇ひ入れた。……フォーファはもう士官學校へやられてゐた。

アヴェニールは窓近く舊い安樂椅子に寄つてゐた。晴朗い天氣であつた。朗かな秋の空は、裸になつた菩提樹の暗褐色の線を劃した上に青く輝いて、此

處彼處、黄金の色褪せた残りの木の葉が枝の中でさら／＼と鳴つてゐる。地を覆うた霜が日に溶けて露の滴と凝り、紅い日の光は土色した草原に斜めに射し、空には微かな心地よい響があつて、果樹園の中で働いてゐる人々の聲が確然聞こえて来る。アヴェニールは古いボカラの上衣を着て、緑色の頸巻をしてゐたが、それが恐ろしく落ちくぼんだ顔の上に死の色を閃めかした。私を見て非常に悦んで、手を出した、話しかけようとしたが、直ぐ咳嗽が出る。私は鎮めてやつて、其傍へ坐つた。……アヴェニールの膝には、コルトソフの詩をば丁寧に寫した寫本が載せてある。彼は一寸笑ひながら其本を撫て、「これこそは詩人」と努めて咳嗽を押へ付けながら、吃り出す、そして、殆んど聞こえないやうな聲で朗吟した。

霧の裏は

囚はれて繋がるべきか。

空行く路は

彼が爲め鎖さるべきか。

私は彼を止めた、醫者は話するさへ禁じてある。私は彼を樂ませる所以を知つてゐた。皆言つてゐたが、ソロコモフは決して當時の學問の進歩の度合につれては居なかつたが、何時も當時の智識の上流が何處まで達してゐたかを知るに腐心してゐた。折々舊友を招いて質問する。傾聴し驚駭し、一語毎に信じて、後を追うて繰り返す。彼は特に獨逸哲學に興味を持つてゐた。私はヘーゲルに就いて語り初めた。(此は諸君が御承知の、少し以前には克くあつた事だ)、アヴェニールは尤と首肯いて、眼を舉げ、微笑して、小聲に、「解つた、解つた、大したものだ、大したものだ……あ、此の氣の毒な死に近い家無き放浪者の兒童らしき好奇心は、眞に涙を催させた。殊に私の言ひたいのは、アヴェニールが一般の肺病患者のやうに、自分で自分の病氣を欺か

うとはしなかつたことだ。……けれども、それが何だらう、——彼は吐息一つつかず、不平も言はず、自分の地位に關してさへ一言も言はなかつたてはないか。……

彼は元氣を振り興して、モスカウの事、舊友等の事、ブシキンの事、ドラマの事、露西亞文學の事に付いて語り出した。我々が嘗て集つた小晚餐會連中の烈しい討論會などを言ひ出して、既に世に無い二三の友人の名をば口にして惜がつてゐた。

「君はダーシアを覚えてゐるか」と彼は言ひつゞける「あゝ、金無垢のやうなあの心、あの情、僕を彼様に愛してくれて、……今は如何様なつたらう、弱つて衰へたらうな、可愛さうに」私は此病者の空想を破る勇氣は持たなかつた。實際、ダーシヤが前とは打つて變つて、氣儘者になつた事や、コンダツチエコフ兄弟の商人の保護の下に生活してゐる事や、紅白粉を塗て、始終惡

くたれをついてゐる事などを何て彼に知らせる必要があらう。

「だが、私達は」と彼の弱つた顔を見てゐる中に私は考へた。「彼を此處から連れだす工風はあるまいかしら、すれば、まだ療す機會も無い事はあるまい」が、アヴェニールは私の意志をば遮つて、言つた。

「いや、君、有りがたう、何處で死んでも同じだから、それに冬までは生きて居さうもないし、ね君、……心配して見てもつまらない。それに此家には慣れてゐるから、なる程家の人々は……

「不親切だらう、ね？」と私は口を入れた。

「いや、不親切て事はないが、人情は解しない、けれど、不平は言へない。それに隣人があるから、隣のカサティン氏の娘は教育もあるし親切だし、愛嬌がある娘で……自慢もないし……」

ソロコモフは又た咳嗽し初めた。

「僕は別に何も氣には掛けまい」と、呼吸をつきながら言ひつゞける。「僕に僕のバイブさへ持たして置いて呉れるなら、……僕は此れて死んでも、バイブは放すまい」と、忙はしく瞬たきしながら言ひ加へた。「神に謝す、僕はもう十分生きた。多くの立派な人々も知つたし」

「でも、君、親戚へは告げなくては」と私は口を入れた。

「何故知らせるんだ、何の役にも立ちはしない。僕の死んでから聞くが好い。何んで知らせる要があるもんだ。それよりは、君が外國で見て来た事でも僕に話して呉れたまへ」

私は自分の經驗を語り初めた。彼は熱心に私の話聞き惚れてゐたらしい。夕方になつて私は別れて来た。十日後に私は次ぎの手紙をクルビアンコフ氏から受取つた。

拜呈、御報申上げ候、貴下の友人にして、生が家に起臥せられたる學生、

アヴェニール、ソロコーモフ君、三日前、午後二時に死去せられ候まゝ、小生が手許に於て葬儀營み、本日村の寺院の墓地に埋葬いたし候。氏は別封の書籍原稿をば貴下に送致するやう望まれ候。氏が所持金廿ニルーブル半は、他の所持品と共に氏の親戚の手に渡り候。貴下の友人は死に際して意識十分に明かに、生が全家族の者共の最後の別れにも決して悲しき色を見せざる位、氣弱なるさまは少しも見えず候、荆妻、クレオバトラ、アレクサンドロフナ、貴下に宜しくと申出候、貴下の友人の死の爲めに、勿論妻は神経を痛め居り候、生自身は幸にも健全に候。頓首。

ジー、クルビアンコフ。

私には死に付いて一層多くの例證が思ひ起される、一けれど、一人て萬事を語る事は出来ない。も一つだけ語る事にする。

私は或る老婦人の臨終の床に侍した事がある。牧師は死にゆく人の爲めに祈禱文を読み初めた。が、不圖氣が付くと、病者はもう眞個死にかゝつてゐる。牧師は急いで、キッスする爲めに十字架を其老婦人に手渡した。すると婦人は不快なやうな様子で寝返を打つて、……「何と云ふ慌て方です、貴方様」と殆んど聞こえないやうな聲で云ふ「其のまあ慌て方は……と、婦人は十字架にキッスして、手を枕の下に入れて、其まゝ呼吸絶えて了つた。枕の下には銀貨が一個あつた。臨終のつとめを果して呉れるので牧師に禮をしようとしたのだらう。……

實際、露西亞人は不思議な死様をする。

莓の清水

八月の初旬でも時とすると暑氣の耐へられない位のとがある。其様な氣候の時には、正午から三時位までは、如何様な熱心な思切つた遊獵家でも獵する事も出来ないし、又如何様柔順な獵犬でも「主人の踵をば背め初める」と云ふのは、主人の直ぐ後方から追従て來て、苦しうに眼を光らせ、舌をば有りさり長く出し、叱りても爲ようものなら、あづ／＼した風で尾を揺つて、困惑と云ふ顔付さを爲てゐるが、少しも走り出さうとはしない。

私は丁度斯様な日に獵に出掛ける事に爲つた。せめて一寸でも何處か木蔭で横にならう／＼とするのを疑乎と耐へてやつて來ると、私の強壯な犬は、今日は幾程腕いても到底も巧くは行くまいとは知つてゐるやうであつたが、それでも長いこと藪の中をば走り廻つてゐた。あまりの暑さで呼吸も詰りさ

うだ。私はとうとう今の中に自分の根氣を勞らさないやうに仕様と考へ出した。イスタの川まで行つて見よう、諸君が既に知つて居らるゝ彼の川まで。で、私は急峻な崖を下りて、濕っぽい黄色な砂路を、此附近で「荷の清水」と呼んでゐる出水の方へ歩いて行つた。

清水は斷崖の罅隙から沸き出してゐる、其斷崖は次第に廣がつて、小さいけれど深い水溜りになつてゐて、其處を二十歩も行くと、ふつくと樂しげな音を立て、水が川へ流れ落ちる。水源の邊は、短い天鵝絨のやうな草が緑を敷き、日の光もなか／＼此冷たい銀色の水の處までは射して來ない。其處まで來て見ると、草の上に赤楊の木で造つた水呑みが一ツ置いてある。此處へ來る人の爲めに、通りかゝりの農夫が殘して行つたのだらう。私は其れて濁を消して、木蔭に横になり、さて周圍を見廻した。

斷崖の一箇所に洞穴がある。其處は水が川へ流れ落ちるのでえぐられ峭ら

れて出來たので、漣波の痕が深く岩に刻まれてゐるが、見ると、其洞の中に二人の老人が私の方に背を向けて腰を卸ろしてゐる。一人は何方かと云へば岩疊な長身な方で、さちんとした上衣の濃い緑色なのを着て、縁取つた帽子を冠り釣を垂れてゐる。最一人は瘠せた小形な方で、補綴の當つた回緞の上衣を着て、帽子は冠らずにゐる。此男の膝には蟲の一ぱい入つた小さな壺がある。其壺に當る日光をば遮らんとする様に折々自分の灰色の頭の所まで手を舉げてゐる。私は一層氣を留めて見ると、其老人はスミヒノ一村のステイオプスカだと判然つた。私は暫く諸君に此老人の話をする許しを願ひたい。私の村から五六哩隔つた所にスミヒノ一と云ふ大きな村がある。其村には、コスモ上人及びダミアン上人の名目で建てられた石造の會堂がある。此會堂に而して嘗て大きな構への地主の家が立てゐた。色々な物置部屋、事務室、工場、厩、取者部屋、湯殿、假建の臺所、泊客や收税吏に取つての離屋、

貯藏所、村人の爲めの鞆、其他何にかと必要な建物が其家をば取巻いてゐた。或る富裕な地主の一家族が其家に住んでゐて、萬事障り無く過ぎて行つたが、或朝突然火が出て、其家財一切は灰燼に歸して了つた。持主は他へ移る、其跡は荒れ果てる。無數の建物の焼跡の黒ずんでゐる所は、所々に煉瓦や舊い土臺の残物を積み上げて、野菜畠に變ぜられた。焼残りの棟木などを集めて間に合はせに小屋を作り、十年程以前に、其家の主人がゴシック風の離亭を建てる目的で取寄せて置いた木材で屋根を葺いた。そして庭師のミトロフアング、女房のアキシニアと一緒に七人の子供を連れて、其中に住む事に成つた。ミトロフアングは其畠から上る青菜や其他の野菜物をば百五十哩ばかり先方へ移つた主人の食卓へ送る事になつてゐた。アキシニアの仕事は、以前にモスコウから高價で購つて來た、ティロロイズ種の牝牛を飼ふ事であるが、此牛は買つて來た以來まだ一度もミルクを絞つた事が無い。此外ま

だ、主人の残して行つた飾毛のある灰色の雄鴨が一羽、此女の手にかかされた。子供等には、まだ年齢が行かないと云ふので、別に此れぞと云ふ仕事は言付けられなかつた、従つて怠け通して大きくなるのを何人も叱り者が無いと云ふ有様であつた。

私は偶然二度程、其庭師の小舎で泊る事になつた。其處へ立寄る度毎に胡瓜をば貰ふ事になつてゐた。其胡瓜は何の所以であつたか知らないが、夏ても特に、其形狀、其水ツぼい味ひ、及び其厚い黄色な皮などは、他所の物とは際立つて異つてゐた。

私が初めてステイオブスカに逢つたのは其小舎であつた。以前の地主の家僕の中でスミヒノ一の村に止つてゐる者は、ミトロフアングの家の子と、片目の兵士の寡婦の家に厄介になつてゐる聲で會堂の番人をしてゐるゲラジム老人との外には居ないのだ。今諸君に御紹介しようとするステイオブスカな

どは「家僕」と云ふ特別な階級へ入れるべき人間ではない。否な、「人間」と云ふ階級の中へさへ入れられるべき者でないかも知れない。

何人でも社會に於ける何等かの地位がある、少なくとも幾許かの關係はある。「家僕」の連中でも、賃銀は受取ら無いまでも、少くとも所謂「日給」は貰らつてゐる。ステイオブスカに至つては全然生計とすべき何等の物もない、何人にも關係が無い、彼の存在すら知られない。此男には一つの「過去」が無い、此男に付いての話などは聞いた事が無い。恐らく其名は戸籍帳にも載つてゐない。只此男が一度何人かの侍僕になつたと云ふ風説はある。が、一體此男は如何いふ者で、何處から來たか、父は何と云ふか、如何してスミヒノ村の住人になつたか、何日からとも知れず身に着けてゐる其回絨の上衣は何をして得たのか、何處に住んで居て、何を食つてゐたか、何人にも少しも見當が付かない。實を言へば、此様な問題には何人も少しの注意す

ら仕ないやうになつてゐるのだ。

トロフイミツチ祖父様は、四代位は引續いて家僕等の血統は知つてゐる人であるが、一度斯様な事を言つた。何でもステイオブスカがトルコの女と關係した事を覚えてゐる。其女と云ふのは旅團長をしてゐた其主人のアレキシ、ロマニツチが荷車へ入れて戰場から連れて來たのであつたと。彼れは祭日にも給料を渡す日にも、舊時からの習慣で蕎麥團子かオッカで祝をする日でも、決して斯様な時にステイオブスカが其笑つたり騒いだりする席へ出た例しが無い。腰を曲げて主人の手にキッスした事も無ければ、主人の健康を祝する爲めに、其主人の目前で收税吏が肥た手で注いで呉れた一杯の酒を舉げると云ふ事も無い。恐らく傍を通つて、食ひかけの蕎麥團子を彼に呉れと云つたら平氣で分けて呉れるかも知れない。復活祭の日に大勢が彼に「クリストは蘇生られた」と云つたが、彼は其脂染みた筒袖をまくり上げもせず、

衣囊の中から色のついた鶏卵を取出して、ふら〜いつたり、目を細くしたりして、若主人の女主人の前へそれを出して見せるだけだつた。

夏は晴の後ろの小舎に住み、冬は湯殿の傍の部屋に入つてゐる、烈しい霜の夜でも乾草棚で寝てゐる。家僕等は幼時から彼を見馴れてゐるので時々彼を足蹴にかける事はあつても、誰一人彼に話を仕掛ける者はない。ヌステイオフスカはまた生れてから此方、それでも口を開いたことがあらうかと思はれる位だ。火災後は皆に捨てられて庭師のミトロフアンの家に厄介になる事になつた。と云つても、庭師は只打捨つて置く計で「俺と一所に居ろ」と言つたのでもなく、さりとて、追出さうとするのでも無い。事實、ステイオフスカは其家に置いて貰らつてゐるのでは無い。其庭の中に住んでゐるのだ。彼は全く音を立てない様に動き廻り歩き廻る、何か心配でもある様に、手を後方に背負つて、嘔吐したり咳嗽したりしてゐる、始終忙はしい、蟻のや

うに彼方此方へこそ〜歩いてゐる、それも食ふ爲めに——單に何物か喰物に有りつかうとするばかりにしてゐるのだ。實際朝から晩まで何か食ふ〜と働かなかつたら、可憐さうに、必度餓死したに違ひない。其日の晩までに何を喰ふのか朝から當ての無いと云ふ運命だ。時とすると籠の下へ腰を卸して大根を咬つたり、胡蘿蔔の汁を吸つたり、泥の付いた菜の莖を嚼み割つたりしてゐる。又時には唸りながら何か漁るのか水中をバケツを引廻してゐたり、小さな鍋の下で火を燃いて、衣囊の底から脂肪の断片か何か取出して投入れたりしてゐる。又、自分の身を入れて置く小さな木小屋の中で、釘を打ち込んで麴包を載せる棚を作つてゐる事もある。一切を、内密黙言つてやつてゐる。何人でも二目と見ない中に彼の姿は何處へか見えなくなつて仕舞ふ時がある。

嘗て二日程何處へか見えなくなつて仕舞つた。勿論何人も彼が居ないとして

別に氣にも留めなかつた……が、見ると、もう、復た何處からか出て来て、其處の籬の下で、こそく木枝を集めて鍋の下へ火を燃き付けてゐるてはな
いか。

顔は小さく、黄色な目で、頭髮は眉毛の上まで掛り、鼻は鋭つて、耳は大きく蝙蝠のやうに透明やうだ。そして髯は二週間程も剃らなんて置いた位に
伸びてゐる、が、それ以上には伸びるさづかひはない。

私がイスタ川の岸で他の最一人の老人と一緒に居るのを見た。ステイオブ
スカと云ふのは即ち此男である。

私は其傍まで行つて、言葉を掛けて、傍へ腰を卸した。見ると、ステイオブ
スカの同伴者も亦私の知つてる男だ。ピオトル、イリツチ伯の農僕で自由の
身にされたミハール、サヴェリツチと云ふ男だ。そしてテューマンと云ふ緯
名が付いてゐる。此男は肺病に罹つたホルホフスキの男と一緒に住んでゐた。

其肺病の男と云ふのは旅人宿を開いてゐて、私も五六回其處へ宿泊つた事
ある。

オーレルの街道を旅行して行く若い役人とか、又暇のある人々は（縞絨な
どをどつさり持て歩く商人などは其様な暇はないが）、トロイマカの大きな村
から其様遠くない、殆んど街道に接して非常に宏大な木造の二階建ての家が
全く頽廢して、屋根は落ち、窓は塞がれてゐるのを、今でも見る事があるか
も知れない。明るく日光の照らしてゐる日中など、此れ程陰氣な有様を見せ
る物は他に想像も及ばない位だ。

此家に以前伯爵ピオトル、イリツチが住んでゐた。此伯爵は舊時からの貴
族の血統で、客呼びが好きなので有名であつた。一時に全領地の者共を家へ集
め、舞踏はする、皆の心いつばい、聲になる位まで、田舎仕込の合奏は始め
る、煙火は上げる、ローマ蠟燭は點すると云ふ騒ぎであつた。此様な騒ぎを

した華族屋敷の荒地を通つて、溜息をつきながら、そのかみ自分等の若かつた日の事を思ひ出す女は一人や二人ではあるまい。

其家の伯爵と云ふのは此大宴会をば幾日も續けて、自分に媚る客人の中をば愛相の好い笑顔をしては歩き廻つてゐるのが好きであつたが、不幸にも、伯の財産は其一代ぢうは續かなかつた。全然破産して了つた其果てに、何か地位を求める爲めにヒタースブルクへ出掛けて行つて、遂に、旅泊の一室で骨折つた何の甲斐もなく死んで了つた。此テューマンと云ふ男は伯の家令で、伯の生前既に自由權を得てゐた。年齢は七十位で、正しい快活な顔をしてゐる。彼は殆ど常時、カザリン時代の人々のやうに微笑んでゐる。——嚴しいやうな柔しいやうな笑だ。話をするには靜かに唇を開けたり閉たりして、輕やかに瞬きしながら、聲は少し鼻へかゝる。悠々として鼻をかむ、それから鼻煙草を取り出す、何か重々しい事をやつてゐると云ふ調子だ。

「ヤア、ミハール、サヴェリッチ」と私は聲を掛けた。

「何か釣れたかな？」

「ハア、此籠を御覽しろ、鱧二尾とモロコ五尾あげました。……ステイオフカ、其れを御目にかける」

ステイオフスカは籠を私の方へ引いた。

「近頃元氣は如何だな、ステイオフカ？」と訊ねた。

「へえ、ゝ、別に、どうつて事も、旦那様」と、何か舌の上に重い物でも載せてゐるやうに吃りながらステバンは答へる。

「ミトロファンも元氣かな？」

「へえ、ゝ、旦那様」

憐な奴は彼方を向いて了つた。

「だが好く食ひ付きましねえや、」とサヴェリッチは言ひ出した、「餘り暑過ぎ

るから、魚の奴疲れて、何處か藪の下へても行つて寝て仕舞たんでしよう。蟲を付ける、ステイオブスカ」

ステイオブスカは蟲を取出して、掌へ載せて、二三度突つて、釣針に差して睡をかけ、それからサヴェリッチに渡した。

「イヤ、ご苦勞、ステイオブスカ、……それから、貴方、旦那」と私の方に向つて言ひ續けた「貴方出獵がお好きですか？」

「見る通りさ」

「ハア、——て貴方の犬は英國種ですか、獨逸種ですか？」

と訊いた。此老人は此様な場合に、「自分だつてまだ此世に生きて居るのだぞ」と云ふやうな氣勢を示したいのだ。

「さア、僕は自分で何だか知らないがね、何しろ好い犬だ」

「ハア、追犬も、お連れてしようがな？」

「ア、六匹ばかりあるね」

テューマンは微笑みながら、首肯て見せた。

「御尤でさあ、人に依つちや、全然犬に陥り込んで了ひなさる方もあるし、何が何でも犬なんか不用と云ふ方もある。私の考へぢや、まあ、犬は第一見掛が大切ですね、……それから姿勢が好くなくては駄目です、馬でもさうです、獵夫でもさうです、皆それ／＼に姿勢がありますからな。逝つた伯爵は——神様お恵みを御下し下さい——まあ、全く獵は駄目な方でした。犬だけは持つて居られて、年に二度位連れて出て行かれるのが道樂でした。獵師は皆庭に集まつて、細い紐で縁取つた赤色の長袴を着て、角笛を吹き立てる。伯爵が御出になるのを迎へて、馬を引いて来る。伯爵が御乗りになると、獵師の長が御足を鎧の中へ入れ申して、帽子を取つて鞭を載せて伯爵に捧げる。伯爵はまあ斯様な風に鞭を鳴らすのが御好きで

した、獵師の長が聲を擧げると、皆して門から出て行くのでした。一人の獵師が伯爵の後方から乗つて行き柔い革紐で、伯爵の二匹の愛犬を引いて、注意して行くのでした。まあ其時の有様を想ひやつても御覽じろ……此獵師はコサックの鞍の上へ高く乗つて、頬の紅い、眼を、斯様風にぎょろ／＼させる男でしてね……まあ、其様時には屹度客人も澤山集つめて来てゐましてね、宴會はある、儀式はある。……あ、此亞細亞人のやうな此御主人も遂に無くなられて……」と云ひかけたが、突然やめて、釣糸を引いた。「伯爵は餘程大まかな暮しをされたと云ふ事ぢやないか」と私は訊いた。老人は餌の上へ唾をかけて、復び釣糸を垂れながら「それは何人も知つての通り、大様な立派な方でした。折々ペテルスブルクから見えた方も、皆お歴々の方々ばかりださうでしてね、色彩したリボンでは胸へ着けて皆な食卓へお着きてした。又伯爵のお響應振と來ては大

したものでした。折々私をお呼びになつて「ティーマン、明日までに鱈の生魚が入用だがな、あるだらうか、どうぢや」と言はれるので「はい、貴方様と」、屹度御答へするのです。刺繍した上衣とか、假髪とか、杖とか香料とか、艷煙草の箱、大幅な畫面、皆な巴里から直接にお取寄せてした。宴會の開かれる時と來たら、それこそ大したもの、花火は揚る、山車は出る。祝砲さへ發射つ、四十人からの合奏が初まると云ふ騒ぎ、此合奏には一人の獨逸人の指揮者が居ましたがな、高慢な男でしてね、御主人と同じ食卓でなくては食事をしないと云ひくさる、それでとうとう伯爵も追ひ出さうとされたのです。「乃公の樂手は指揮者などは不用ん」と言はれる。御尤の事です。やがて舞踏が初まる、朝まで踊りつづける……あ、喰付いた」(老人は水から小さな鱈引上げて)「あ、ステイオブカ」と呼んだが、また釣糸をば水中に垂らして言ひ續ける。

「眞實に御主人らしい御主人でしてな、眞に親切なお方でした。時々私なにか打たれた事もあつても、一廻りぐるつと一まはりしない中にもう忘れて仕舞ひなされる。だけれど只一つ困つた事がな、貴方お妾が御有りなさつて、あゝ、彼様な者が、神様！御主人の破滅でした。だがな、當時其様いう者は下層からばかり御引上げてした。で、何も別に費用もさう多くは要らんと思召すかも知れませんがね、どうして、彼様な者こそ、歐羅巴中で最も贅澤な眞似ばかりしてゐますあ。そりや、人に依つては「好いた様に生活てゐたら好いちやないか、主人の勝手なもの」と云ふかも知れませんかな。何も破滅になつちまう事もありませぬ。殊にアクリアで女がありましてな、今では最うなくなつてゐますがね。(神様其人を御救ひ下さい)、シトイアの番人の娘で、まあ、何と云ふ悪人でしょう、折々伯爵の顔を平手で叩くと云ふ始末、御主人をば全然迷はしてしまひましてね、私の

甥の奴め其女の新しい衣物に少許チヨコレートを瀉したと云つて兵隊にやられて了ひました。だが、其女の迷はしたのは御主人一人では無かつたやうですがね。あゝ、でも、彼の時分は盛んだつたな、と吐息をついて、頭を前方へ垂れて黙して了つた。

「して見ると、御主人も仲々酷しい方だつたね」と私は少し間を置いて訊いて見た。

「いや、それが彼の時分の習ひでした、貴方」と頭を振りながら答へる。

「今時はもう其様な事は無いかね」と私は其老人から目を離さずに訊ねた。

老人は一寸と私の方へ横目をくれて、

「今は、まあ幾らか好ござんしような」と小聲で言つて、釣糸をば一層長く弛めた。

私等は木陰に坐つてゐたが、それでも仲々息が塞るやうだ。蒸暑い空気が

動かすに重苦しい。火のやうな顔をあげて不安さうに吹く風を求めても、何もそよとも動かない。日は蒼い黒ずんだ空から直射して、正面の向ふ岸には燕の黄色な鳥が續いて、にがよもぎの藪が其處此處に點在してゐるが、其藪の穂の一つすら動かない。少し下流の方に當つて、作馬が一匹川の中に膝まで没して、緩やかに尾を揺りながら立つてゐる。折々岸から垂れ下つてゐる藪の下へ大きな魚が浮き上つて、水面に漣波を立たせるが、又靜かに水底に沈んで、其あとには微やかな渦紋が巻いてゐる。蟋蟀の聲は焼け枯れた草の陰から忍んで來、鶉の倦怠るさうに嫌々さうな叫びが聞こえる。鷹が羽音も立てず牧場の上を舞つてゐて、折々同じ場處に止つてゐるが、又不意に羽叩きしたり、尾をば扇のやうに開けたりしてゐる。

私達は暑氣に壓倒せられて、動かさず坐つてゐた。すると、不意に後方の池に物音がして、何物か清水の處までやつて來たやうだ。見廻すと、五十許

の農夫が、砂塵だらけになつて、襦袢一つで、藁靴を穿いて、肩には蔓で編んだ籠と外套とを掛けてゐる。清水の所まで行つて、如何にも渴いたやうに飲んで、それから起き上つた。

「ア、フランスカ」とテューマンは其男を見詰めて聲を擧げた。元氣は好いかな。一體何處からやつて來たんだ」

「ア、ミハール、サヴェリッチさん」と農夫は私達の方へ近くやつて來て、少し遠方からやつて來たんだ」

「何處へ行つて居たんだ」とテューマンは訊いた。

「モスコウへ、御主人の所へさ」

「何に？」「少し御願があつて」「何の？」

「いや、地代を減けて貰ふか、働いて返すか、それとも、他の地面と取換てもするか、何とか爲なけりや……餓鬼の奴が死にやがつて、一人手ぢや如

「何にもやりきれねえ」

「お前の息どんが死んだ？」

「あア死んだ」と暫く間を置いて、「モスコウで取者を爲てゐたがね。實を云ふと、彼奴が此迄地代を出してゐたんだ」

「ぢや、此からお前が拂ふんか」

「あは、」何て、言はれたら御主人は？」

「何てつて、俺を追拂つて仕舞つて、言ふにや、乃公の所へ直様に來たつて駄目だ、斯様事にや收税吏つて者がある、まづそれに言へ、…それから、何處へ地換へをして貰ひたいのだ、それには第一に滞つてゐる地代を拂へ」と全然怒つて、手が付けられねえ」

「それで、如何して歸つたんだ」

「それから、彼奴が何か残して置きはしめえかと行つて見ると、さつぱり判

然らねえ、俺が彼兒の阿爺で」と親方に言ふと、「あゝさうか、どうか知らねえか、お前の兒は、何も残しちや無えぜ、借金は少しは有るが」と斯うぢや無えか、それで俺ら突走つて來ただ」

其農夫は、何か他の人の話でもする様に微笑しながら全體を語つたが、其小さな歪んだ眼には涙が湧き、其唇は顫へてゐる。

「ぢや、此から家へ歸るんか」

「他に何處へ行かず、歸るんさ、女房の奴、今時分半分餓死でら」

「それぢや、お前は如何しても…と突然にステイオブスカが口を出した。が又周章てたやうに、蟲籠の中を掻き廻し出した。

「ぢや、お前は收税吏の所へ行くんか」とテューマンはステイオブカの方を不思議さうに眺めながら言ふ。

「何に行けるものんだね、——まだ未納だ。餓鬼の奴死ぬ前一年病臥てゐた

で、其の間の地代が未納だ。だが大丈夫、如何する事も出来ねえ、幾許でも巧くやるならやれ……素裸體の者にや仕様がねえ（農夫は笑ひ初めた）
キンティリアン、セメニツチは巧いのかも知れねえな、若……」

ヴラッスは復た笑つた。

「うむ、困つた事に成つたな、ヴラッス」と、如何にも深く考へたやうにテムンが突然言ひ出した。

「困つた、いしや、（ヴラッスの聲は顔へてゐる）、酷く暑いな」と、袖で顔を拭きながら云ふ。

「お前の主人て何人だ」と私は其男に訊いた。

「ヴァレリアン、ペトロヴィツチ伯爵でさ」

「ビィオトル、イリツチの息子かな」

「さうです、ビィオトル、イリツチが今の伯爵に生前、ヴラッスの村を呉れ

たんでさ」

「伯は元氣かな」

「いや大元氣、有難え事に、眞紅かな踏ん付けたやうな顔で」

「ねえ、旦那」とテムンが私の方に向つて言ひ續けに、「モスコウ近くだと好いですがな、何分此邊で地代を出すのは全く骨でさあ」

「一體お前の地代は幾許だね」

「九十五ルーブルでさあ」とヴラッスはぶつ／＼言つてゐる。

「此邊ぢや、ね、畠地が少なくて、大方森ですからな」

「それに、風説だと、此邊も賣つたんだつて」と農夫は言ふ。

「で、ね。——オイ、スティオブスカ、蟲を呉れ、やあ貴様は睡てゐるんか」
スティオブスカは起上つた、農夫は私達の傍へ腰を卸ろした。皆なは再び沈黙に沈んで了つた、向の川岸を何人か唄をうたつて行く——が、それも如

何にも悲しさを調子だ。ウラッスは深く氣落ちがして了つた。
半時間程たつて私達は分れて仕舞つた。

散文詩

自然

私は高い弓状の屋根をした廣大な地下の會堂へ行つた夢を見た。其處には一種川下獨特の光りが充ちみちてゐた。

會堂の眞中には嚴めしい一人の婦人が、綠色のふはりとした上衣を着て坐つてゐて、頭をば押へて、深い想ひに沈んでゐるやうに思はれた。

突如として、私は此婦人が「自然」其人であると氣が付いた。すると、敬懼の感じが、忽ちに私の心靈の眞底まで振動させて了つた。

私は其坐つてゐる人に近づいて、恭しく禮をして「我等萬人の母上」と聲をかけた、何を默考したまふ、人間の未來の運命を熟慮したまふか、或は人

間の達し得べき最高の完全幸福なるか」

婦人は静かに私の方へ、其黒い腕付けるやうな眼を向けた。唇が動いたと思ふと、私は鐵の響のやうに鳴り渡る聲を聞いた。

「私は、如何すれば、蚤の足筋を今より強くしてやる事が出来るか考へてゐる。最少し容易に敵から逃げさせてやりたい、攻撃防禦の均衡は破られた……恢復されなくてはいけぬ」

「其様な」と、私は答へるに躊躇つた。「其様な事を考へて居らるか、では、我々。人間は、貴方の愛見では無いのか」

婦人は軽く眉を蹙めて、「萬物は私の兒童だ」と、言ひ切つた。「私は萬物を一様に世話をする、が、又一様に破壊もする」

「だか、善……理性……正義……」と
私はまた口ごもつた。

「其等は人間の言語だ」と私は其鐵のやうの聲で言ふのを聞いた。「私……悪も知らない、……理性は私の法則ではない——何が正義。」

私はお前に生命をやつた、又取つて他のものに與へる、蟲だらうが……うが、……關はない……お前は自分の事を氣に掛けてゐるなら、……の防害をするな」

私は言ひ返へさうとしたが、……大地は洞のやうな呻きを發して、……して、私は目が醒めた。(千八百七十九年八月)

クリスト

私は夢で、屋根の低い木造の教會の中で、自分の身が、青年とよりは寧ろ一人の少年になつてゐるのを見た。細い幾多の蠟燭は、赤い點となつて聖徒の舊い畫像の前に輝いてゐた。

色彩のある光の輪は薄い火炎の上毎に繞つて、教會の中は暗く朦朧としてゐた。……が、多くの人々は私の前に立つてゐた。皆美しい頭髪をした農人の頭だ。其等の頭は、断えず左右に揺れ、曲がみ、又起き上る、丁度、熟した麥の穂に夏の風が渡つて、うね／＼と波立つやうだ。

突如として何人が背後から来て、私の傍に立つた。

私は此人の方へは向かはなかつた。が、不圖此人はクリストであると覺つた。

感激、好奇、恐怖は急遽として私を襲つて來た。私は努めた……そして傍へ來た人を見た。

何人にも似たやうな顔だ。萬人の顔のやうな顔。眼は少し仰視して平靜で心籠つてゐる。唇は閉ぢてゐるが、結んでは居ない。言はゞ、上唇が下唇の上にあらずんでゐるのだ。少し許りの顎髯が左右に分れてゐる。両手は拱ぬいて、靜平としてゐる。そして其衣服も何人でものやうな衣服だ。

「何といふクリストだらう」と私は思つた。斯様な普通平凡な人、さうだらうか」

私は振り向いたが、眼はまだ此平凡な人から去らなかつた。時に、私は又此私の傍に立つてゐるのは眞にクリスト其人に他ならぬと覺つた。

また私は力を籠めて見た……がやはり、萬人の顔のやうな全じ顔、知らない人ではあるが、毎日出逢ふ其顔。

すると不意に私の氣は沈んで、目が醒めた。が、其時初めて、私は、此様な顔、萬人の顔に似た顔こそは——クリストの顔だと解つた。(千八百七十八年十二月)

森と原野

そらにも引かることとく、
歸り來し里や園生や、
菩提樹はいや影たかく、いや深く繁りもゆくよ、
百合の花谷に匂ひて少女子のさまにも似たり、
茂合ふ柳の影は行く水のふちを繞りて、
立ちならび堤に垂るゝ。檜の樹は、
雄々しく立ちて、荒れし野の上に茂りつ麻の香のはのめくあたり、いら草の茂れるあたり、
豊かにも、はたか黒くも大地は天鷲絨のこと。
音なくも静にゆらぐ、大波の漂ふさまや、夢の穂はいと心地よく目もはるに果てなくつらき、
重やかに黄金の光、此處にしもさして來つるは、
群がれるま白き雲の其陰を洩れて來にけむ、

物皆のめてたくもあるかな。

讀者諸君は、實際、私のスケッチにもう倦かれた事と思ふ、て既に書いた断片に止めて以後はやめに爲ようと云ふ其約束をば今果たさうとするが、其前に猶遊獵者の生活に付いて少し許り言つて見ようとの念は禁じえられな

い。犬を連れ銃を肩にして、獵に出掛けて行くと云ふ事は、只だ其れだけで愉快な事だとは、舊時から言ひならされて居るが、諸君が若し獵者でなくつて、然かも全様に自然を愛するならば、諸君は我々遊獵者を羨ますには居られまい……まあお聞きなさい。

先づ第一に、諸君は春夜明け前に戸外に出掛ける時の其の愉快さを御存じか、床から出て、家の階段の處までやつて來ると……黒ずんだ灰色の空には、星影がそこそこにびか／＼輝いてゐる、しめつぼい微風が、極めて幽かに、

折々吹いて來て夜の秘密の判然しないさゝやきが耳には入つて來る、闇に包つまれた樹々のかすかに戦ぐのだ。

馭者共はもう馬車の用意を初め、幌を牽いたり、茶缶と箱とを足臺の下へ入れたりする。馬は絶えず身動きして、鼻を鳴らしたり、前足で同じに地面を掘たりして居る。二羽の白い鶯鳥が、巢から出たばかりで、途を横ぎつて、靜かにのた／＼と歩いて行き、籠の向側の庭の中では、番人がまだ穩かな軒をかいてゐる。總ての物音が、冷たい空氣の中に際立つて聞える——、四邊がしんとしてゐて、何も動かない。

貴君の席へ着きなさい、馬は直ぐかけ出して、車輪は音高く轆てゆく。……一鞭あて、寺も通り越し、右へ坂を下り堤の上を行くと……池の面には、今丁度朝霧がたなびきかゝつて來て、稍々寒さが身に沁みるので、毛皮の外套の頸に顔を埋めてゐると、思はず眠を催して來る。馬は水溜の上

を走つて音高く水を飛ばしたり、馭者は、口笛をふき鳴らしたりする、けれどもも此時は確かに三哩位は來てゐる……、大空の果てには深紅の色が漂つて、楡の梢に不器用に鳴てゐる小鳥の聲、暗い乾草の陰に囀てゐる雀の歌が聞こえて來る。空氣は一層爽かて、道は増々明かになつて、空は輝き、雲は白く、野原は一しほ緑を増して來る。小舎の中では、櫛を集めて赤い火を燃やしてゐる、門の後の方からは、眠さうな人聲が聞こえて來る。暫くすると曙の光がさし初めて、空の上には、既に幾條の黄金の色が漂ひ出し、谷々を包む朝靄は、雲とばかりに厚くたゝなはつて、雲雀の歌は玉を轉ばすやうに、曙告ぐるそよ風は四邊に吹渡して來る。するとやがて靜かに、茜さす朝日の影が登つて來る。もう四邊は一面溢るゝばかりの光の波、人の心は小鳥のやうに躍り立ち、物皆は鮮かに楽しく悦ばしさが溢れ出す。向に一筋の長い途が目には入つてくる、森を越え村を越え、彼方遠く其途の向

ふ處、白い御寺の壁と小山の上の樺の林と、其後の沼の景色とが眺められる、今其處まで行く筈だので……、急げ、馬、急げ、威勢よき足並で馬は駆け出す。また三哩か其位、日は一層高く登て空は澄み渡り、今日の日の華やかな事が思ひやられる。一群の牛が、今村の方から自分等の前へやつて來る。馬車が小山の上に登つたかと思ふと……、まあ何と美しい景色でしょう！、河は十哩の間も霧の中を薄青くうね〜と繞つてゐる、其向には水々しい緑の牧場、牧場の彼方には斜めな丘、遠くの方には、フローバーが沼の上を聲高く鳴きながら、輪をかいてゐる、大氣の中に充ちてゐる鮮な光を透して……、それは夏のやうでは無いのが——遠くの物まで歴々と目には入つて來る。

此時は人は如何様にかほしいまゝに大氣を吸ふ事が出来るだらう、又如何

様に、活潑に身體を動かす事が出来るだらう、春の鮮かな空気を吸て、人は如何様にか健康になる事だらう。

また夏、七月の曉方に藪の中をさ迷ひ歩く事の如何様に楽しいかは此も遊獵者の外は誰も知る事は出来ないだらう。踏んで行く足跡は露白き草の上に一筋の緑の色を記し付て、しつとりとぬれてゐる藪を押分けると夜の間に満ちた暖い薫りが不意に襲つて来る。大氣の中には苦蓬の強い鼻をつく薫りや、蕎麥や苜蓿の甘い薫りが満ち溢れてゐる。遠い方には檜の木が壁の様に立つて朝日の光に照り輝いて居る。静かて又鮮かてはあるが、もう何處となく暑さの近よるのが感ぜられる。立籠める心地よい香の烈しさに頭も少しはぼんやりして来る。森は果てしなく廣がつて……只處々遠くの方に熱したライ麥の黄金の色に輝くのと、紅な蕎麥畑の細い線とが見えるばかり。折ふし車輪のさいくさい音か聞えて來たと思ふと、農夫が静かに藪の中の途を

やつて來て、正午の暑さにならぬ中にとて馬をば日蔭に繋いでゐる。……一寸其男に挨拶して、通り過ぎながら振返して見ると、大鎌の調子の好い音が後から聞こえて來る。日は高く登り草はもう乾きつて、今はもう次第に蒸暑くなる。空はくらくらなつて地平線上に蔽ひかゝる静かな空気がつき通すやうな暑さに照りつけられる……何處へ行つたら水があるだらう、と草刈に尋ねると彼處の谷の井戸の中にあると云ふので、繁つてゐる草のもつれ合ふ深い藪の中を谷の下まですべり下りると、切崖のま下に小さな泉が草にかくれてゐる。柳の藪は飽まで枝を伸ばして其水を隠す大きな手のやうに見える。美しい鶯絨のやうな苔の中に包まれて底の方から振へるやうに白銀の泡がぶくぶくと湧上る。地上に伏て飽迄も其を飲みなさい、と、もう起き上るのも物憂いやうになる。日蔭に來て、しめつばい薫りを吸ひながら息をついてゐると、向の方の藪がさらさら輝いて、言はゞ日の光で黄色に染たかとの

やうになる。何んだらうと思つてゐると、不意に一陣の風が颯と吹渡り、四邊の大氣が動きたす。雷では無からうか。夫とも一層蒸暑くなるのか。又嵐が迫つてゐるのでは無からうか……と思つてゐると、電光一閃……あ、嵐、日の光はまだ燃ゆるやうだから猶つゞけてゐる事は出来る。けれど嵐の雲は次第に深くなり其前の緑の所は長い袂のやうで上から覆ひかゝる……草も藪も四邊一面黒くなる……急げ何處へても枯草小屋の在ると思ふ方角へ……走れ、かけ込め……まあ何と云ふひどい雨、何といふ電光だらう。雨滴はわら屋根の穴から好い匂の枯草の上へしとくと漏れてゐる……けれどもう日影は復た美しく輝き出して、嵐は既に過去たので、またかけ出して来る。あゝ神様の御恵、有らゆる物は皆樂しげに輝いて、大氣は澄んで鮮かに、覆盆子、マッシュルームの匂は四邊に立ちこめてゐる。暫くして夕方となると、大空半ばは光焰と燃え、日が沈みかゝると、空氣は取

わけて水晶のやうに透き通り、遠くの方にはふはくと暑げに見える霞が懸つて、露と共に深紅の光は野原の上に注がれて、やがて黄金の大波は万物を押包む。木の下や藪蔭や枯草の低い積重から夫々長い影が走る……日はもう沈み盡くして、やがて星影が輝き出し、夕映の火焰の海に漂うてゐる。其夕映の色が薄れて行くと、空は青色となり、皆物の影は消え。四邊は暗にのみまれる。もう村の中の今夜宿るべき小舎へ返るべき時となつたのだ。銃を肩にして、勞れてはゐるが急いで行くと……程なく暗くなつて二十歩前も見られない。只暗の中にほの白のは幽かな犬の影ばかり、すると彼方、茂り合つてゐる黒い藪の上、地平線上が茫乎と赤くなる、——何だらう、火事か。いや月が登るのだ。遙か低い左手の方には村の燈火が、はやちらちらと見えて来る。……やうやく小舎へたどりつくと、小さな窓から、白い布をかけた食卓や、蠟燭の燃えるのや、夕餉のさまが一切目には入つて来る。

又或時諸君は輕裝の馬車を仕立て、山鶴でも撃ちに行つて御覽なさい。ライ麥の高く伸びて壁のやうになつてゐる間の小徑を行くのは如何にも心地好い、麥の穂は軽く顔に觸れ、玉蜀黍の花は脚の邊までまつはり、鶉が四邊に鳴いて、馬はのつそくと其間を通つて行く。森がある、木立深く物靜かだ。姿の柔しい白楊の樹は頭の上高くてさらさらと鳴り、樺の長く垂れ下がつた枝は動かうとも爲ない。岩壘な樅の樹は、可憐い菩提樹を護り顔に立つてゐる。緑の小徑、日影が條目を織つてゐる上を通つて行くと、大きな黄色な蠅が凝乎として、羽も動かさずに日光を浴びて止つて居る、と思ふと、つと、舞つて行く。蚊軍が雲のやうに群れて、暗い處では光り、明るい處では黒くなつて飛んでゐる。群鳥は平和に歌ひ出し、ワブラー鳥の黄金の響きは谷間の百合の薫りと和して、罪なき和樂の歌を奏してゐる。猶深く、奥深く奥深く森の中へ行つて御覽なさい……木立は次第に濃くなつて来る……

何とも言はれない靜寂が心の中を壓する。見渡した處も、盡く靜寂で夢のやうだ。が、風が颯然として吹き起つて來た。樹々の頂は大波のたぎつやうに咆り出した。其處此處に去年の落葉の蔭色の中から、草が長く伸びて、色々の菌は廣い縁取つた笠をいたゞいて立つて居る。突然野兎が飛び出す、犬は吠き聲を響かせて後を追つて行く……

だが、此全じ森でも晩秋鶉の飛ぶ頃になると如何様に美しくなる事であらう。鶉は森の奥には居ないものだ、捜すならば森の周圍に限る。森の中は風もなく、日光も射さず、光も蔭も揺らぎも物音もない、秋の香が酒の薫りのやうに、穩かな空中に漲つて居る。黄ばんだ野を越えて遠くの方には茫乎と霧氣がかゝつてゐる。靜な空は、葉が落ちてあらはになつた褐色の枝の間から白く穩かに見えてゐる。所々には群をなして、菩提樹の上に黄金色の葉が残つてゐる。地面は音も無く踏むにつれてしなぐとする、高く伸びて枯れ

た草の葉も動かず、白ちやけた芝草は、露を帯びて一層白く長い線をなして輝いてゐる、靜かに呼吸してゐると、諸君の心靈の中に不思議な震動を覺えるに違ひない、犬の後を追ひながら、森の縁を歩いて行きなさい、すると、死んだ人、現存の人、様々な懐しい面影が心に浮んで來る、長い長い間、睡つて居た心の象が不知不識の間に目醒めて來る、空想は矢のやうに飛び、鳥のやうに踊り出す。總ての物が劃然と動いて、眼前に浮び出す。心は一時高く鳴つて烈しく前途に向つて進む、が、又記憶の中に呼び返し難きまでに沈んで了ふ。いはゞ、此れまでの全生涯が目の前に軽く速かに開展せられるのだ。斯る時、人は有ゆる過去も、有ゆる感情も、有ゆる力も——即ち全心靈を働かせるのだ。四邊に何も其人を遮る物もない——光りも、風も物音も……

また、朗かな稍冷い朝霜の置いた秋の日、樺の樹はもう不思議な國の樹か

何かのやうに全樹黄金の色を帯びて、蒼白い空に向つて畫のやうな形をして立つてゐる時、太陽はまだ空に低く、暑くは無いが、夏よりも猶一層輝いてゐる時、小さな白楊の林は全林盡く輝き渡つて、葉を振り落して自由になつた其氣樂さを悦んでゐるやうに見える。白ちやけた森は窪地の底にあると猶一層白ちやけて見える。今鮮かな風が起つて、落ちて凋んだ木の葉を軽く追つて行くと、小川の面に漣波が青く活々と卷て流れる、思もないやうに浮んでゐる蒼鵝や鴨が拍子とつて頭を昂げる。遠くの方には柳の陰に半ば没して水車がギイ／＼音を立てゝゐる、と、其上を、空に様々な色をして、幾つかの野鴿が小さな輪を描いて疾く飛んでゐる……

また、夏のどんよりとした日が面白い、遊獵者は無論好まないが。此様な日には、直ぐ足許からバタ／＼舞ひ上る鳥でも撃つ事は出来難い。直ぐと一面に立ち籠めて白く茫乎とした霧の中へ姿を隠して了ふ。が、まあ、此様な

時は、何とも、言ひやうの無い平和が到處に満ちてゐる。物皆な醒めて、しかも黙つてゐる。立木の傍を通つて行きなさい、葉一つ動かさず、黙想して休んでゐるのだ。空中に溢つてゐる薄い湿つぽい霧の間から、諸君の眼前に一條の黒い線が見える。つい近くの矮林だと思はれるが、最少し行きなさい、——其矮林は、森の外を劃する境の溝に生えてゐるに、がよもぎの高い列となり變つて来る、頭上も周囲も、四邊が總て霧。……だが、此時初めて微風がかすかにゆらいて、青白い空の光が朧げに覗き出す、と、次第に薄くなる煙のやうな霧の間から、黄ばんだ金色の日の光が不意に射し込んで、長い線となつて、草原の上、矮林の上を照らす。——又復び萬物は暗く包まれて了ふ。長い間、此争ひが續く、が、光が遂に打勝つて、ぼんやりとした霧の波が此處彼處平野の上に破れつ、曳きつ、うねりうねつて、深く、柔かに照り輝く中空へ高く消えて行つたあとの口の華美はしさ、莊嚴さは何とも言

ひ表はしやうが無い。諸君がまた、曠野の中の遠い田舎へ出掛けて行くとする。十哩程も幾多の岐路を越えて進んで行くと、遂に廣い往還へ出る。果しなく續いてゐる荷馬車を追ひ越して、廣く開いた門や、井戸や、小舎の中にぶつ／＼いつてゐる茶缸を掛けた路傍の旅舎を通り越して、村から村と、果てしなき野原と、緑の麻島とに沿うて長い事馬を驅つて行くと、鵲が柳から柳へ飛び、農婦が手に手に長い草搔きを持つて草野にうろついてゐるし、農夫はぼろ／＼の南京木綿の上衣を着て、柳行李を肩にして疲れたやうな足どりて苦しうに歩いて行く。重さうな田舎仕立の大馬車が六頭の大さな喘氣の馬をつけてやつて来るのに逢ふ。座布団の片端は窓の外へ突き出て、一列に積んである荷包の後方の高くなつた上に一人の馭者が毛皮の外套を着て眉毛までも泥をはね飛ばして坐して居る。もう小さな田舎の町へ来たのだ。曲つた小さな木造の家、

遠く續く垣、空虚な石屋店、深い谿谷に架した舊式の橋、……もう少して……噴野の村へ達するのだ。丘の頂へ登つて御覽なさい、まあ、何といふ光景だらう、低い丘の其頂上まで全然耕され、作物が蒔付けられてゐる。其丘の周圍は、廣く波浪の如く走つてゐる。丘と丘との間には、藪で埋つてゐる谿間がうねり繞つてゐて、小さな矮林は長い小島のやうに散在してゐる、村から村へ小徑が走り、會堂は白く際立つて、柳の藪の中には小流れが閃めてゐて、四箇所許り堰で切り塞いでゐる。猶遠い島の中に、一線になつて、舊い地主の家が、其物置や果樹園や、挽場やを備へて、小さな湖水に近く群つてゐる。だが、もし進んで行かない。丘が低く一層低くなつて、遂に一本の木も見られなくなる、此處が果てだ、——際涯なき人跡到らざる噴野！

又、冬の日、兎を追つ掛けて高く雪の吹き切れになつた上を越して行くと

鋭い冷たい空気を吸つて、軟い雪の隈む様な反射で我知らず片眼を閉ぢる、碧緑の空の色の赤ちやけて森の上を覆つてゐる美しさ……そして、春早々、萬物皆輝いて芽を吹き初める頃、雲解の水で、嵩を増した流を渡つて行くと大地は既に溶けゆく香りがして、もう雪の消えた處には日影が斜めに射して雲雀は心頼みありさうな調子で鳴き、悦びの飛沫を立て、音高く瀧は谿より谷へ注ぎ下る。……

が、もう終るべき時だ。此れは次手の事だが、私は春の事を言つたが、春は物事過ぎ易く、楽しみも遠ざかり易い、……さらば讀者諸君！、長へつらぬ恵みを受けたまへ。

犬

「人間が奇怪な事を信じ初めたら、もう理性的動物とは言はれないね」

と言つて、アントン、ステパニッチは腕を組んだ。

此アントン、ステパニッチは、一寸明確は言へないが、さる官省の顧問役をしてゐる男で、極く調子の低い聲で、ポツ／＼句切つて話す癖がある。で、平常も餘程注意して聴かなければ解らない。反對者からはスタニスラウス上人の十字架が彼の身の上に禍してゐるのだとも言はれてゐる。

「それは言ふまでも無い」と、スロレヴィッチは言つた。

「何人だつて其様な事を問題にしはしまい」と、キナレヴィッチは言ひ足した。

「賛成だ」と、常時の室の一隅に坐つてゐた宿の主人のフィノブレントフは

小聲で叫んだ。

「だが、僕には賛成は出来ん、この頃、現に何とも説明の出来ん奇怪な事件が一度僕の身に起つたから」と

此抗議はもう相當の年輩をした、中脊ではあるが、稍々岩盤な、率直な風をした男で、今迄でストーブの傍に黙つて坐つてゐた人の口から發せられた。皆の眼は此人の前へ向けられて、暫く沈黙が續いた。

此紳士はセント、ピーターズブルクからさまで遠くないカローガ州の小地主で、ハッサルスの聯隊に五六年間奉職してゐたが、骨牌で有金全部を失したので、年金を抵當で、能く言ふ「生故郷で菜葉でも作る」と言つたやうな工合に住居を定めて了つた。が、外にも何か財政上に事が起つたものと見えて、一寸した小役にて有り付かなければならぬ様な仕末になつた。が、さて此人には人を心服させるやうな様子もなければ、爲めになりさうな友人とても

無かつたが、幸に只一人の舊友の事を思ひ出した。此の舊友と云ふのは、一體如何して成つたものか何人にも解らないが、急に世間から重要な人物視せらるゝやうな地位に到つた男だ。實は一度此友人を、欺偽師か何かを擲り付けると云つて、助力した事がある。で、此人をたよりに運に委せてゐると、幸ひにも、一週間後には或る官立會社の監督に任命せられた。實に利得な役で、下に何人も付く者もなく。大して頭腦を使ふやうな仕事もない。斯様な事を言ふならば、讀者諸君には此會社がまた空想的なもので、文書面だけで成立してゐるものである事が理解になるだらう、政府はまだ其會社で何を賣買せしむべきか決定してゐなかつた。即ち當局者はまだ財政上新計畫の思考中にゐたに過ぎなかつたのだ。

アントン、ステバニッチはまづ第一に口を切つた。

「では、親愛なる足下、實際に足下に起つたと云ふ其奇怪な、自然法を脱し

た事件をば語つて頂きたい」

「それは無論お話する事は出来る」と其「親愛なる足下」は言つた。此人の名はポルフイリー、カビトニザイッチと云ふのだ。

「自然法を脱した事件」と繰返して、アントン、ステバニッチは稍々熱して、我ながら其言語に得意の色を浮べた。

「いや、さうだ、眞個、僕が今語らうとするのは、そりや實際愕くべき事だ」
 アントン、ステバニッチは嘲笑の様子を示さうとしたが、巧くゆかずに、不意に痙攣でも起つたやうな風になつて、カローガの方から今の紳士の方へ向ひながら

「どうか、其奇怪な冒険談をば委細お話承りたいものだ」

「いや聞いて下さるか、實は簡単な事だが」

と、ポルフイリー、カビトニザイッチは答へて、暖爐の邊から立つて、室の真中

まで歩きながら、話をしはじめた。

「諸君は多分御存じはあるまい、でも如何様か知らんが、僕はユツエルスク州に少し許の土地がある。以前は少し位物も收穫つたが、今ではもう、御承知の、只厄介ばかりで仕方が無い、が、それは今言ふ問題では無い。そこで、此小さな地面の中には、島もある、克く物のあがる野菜畑もある。可也の大きな池もあり、其中には鯉がある。建物もある、まあ斯様な工合で……其中に一軒小舎が有つて、僕が一人て其處に住んでゐたんだ……僕は獨身だからね。

或日の事、丁度六年程前だ、平常もよりは稍々遅く家へ歸つて来た。隣人を尋ねてね、でも、僕の脚は全く疲れてはゐなかつたと云ふ事だけは是非信じて戴きたい。衣服を脱て、床へは入つて、蠟燭を消した。さう爲たかと思ふと、何だか僕の寝臺の下で動き出すぢやないか。何だらう。鼠の

や、どうも鼠のやうぢや無い。身を掻いたり、飛び廻つたり、床を引掻いたり耳の音をさせたり。犬だと思つた。だか、如何して此處へ来たんだらう、僕は犬は飼つてゐなかつた。迷ひ犬だな」と思つたから、下男を呼んだ。「フィルカ」と聲を立てると、其男は手に蠟燭を持つては入つて来た。「如何したんだ、フィルカ、克く氣を付け無さやいかんぢやないか、僕の寝臺の下に犬がある」

「犬ですつて、」と其奴は答へた。「如何様な犬」

「知るもんか、主人を斯様な目に逢はせないやうにするのが貴様の役ぢやないか」

フィルカは曲んで、蠟燭で寝臺の下を捜し廻した。

「何にも居ましねえよ、私達の手のやうに空虚で」と言ふ。

「僕も曲んで見た、が、實際何も見えない、馬鹿な話だ。僕は愕いて目を見